群峰

特集　翁久允

6

二〇二一年四月
富山文学の会

群峰6

富山文学の会

＝目　次＝

◇特集　翁久允
逸見　久美
わが想い出に生きる父翁久允　5
須田　満
翁久允「安孫子久太郎翁と私」
―自筆原稿の翻刻と解説　15
水野　真理子
翁久允と富山
―『高志人』で目指した郷土研究　36
近藤　周吾
新民謡の流行
―『民謡詩人』を中心に　52
◇研究論文
谷川　拓矢
共振する性欲
―田中兆子「べしみ」論、あるいは性欲文学史序説　59
◇資料・報告
高熊　哲也
「黒百合」私注　77
金山　克哉
滑川文学散歩　記録　94
高熊　哲也
文学散歩報告　いたち川沿いを歩く　98
◇２０１９・２０２０年度　活動報告　102

特集　翁久允

わが想い出に生きる父翁久允

逸見　久美

①　限りなく続くさまざまな想い

父の想い出は、限りなくあるが、今それらがさまざまな波紋となって、わが脳裡を馳せては消えてゆく。それらは単なる父と娘の情に繋がる追憶というより、父の残していった諸現象を客観的に検討し、意味づけ、さらに人間的な生き方にまで言及して、「翁久允」という一個の人間像を浮き彫りにして納得してゆきたいと思う。

父が日頃、話してくれていた数々のことが、昨日の出来ごとのように思い返されてくる。父は人の真似だけで終ってしまうのなら始めからやらないこと、必ず自己の独創性のあるものを生み出すこと、それを徹底的に自分でやり通すこと、自分の信念を曲げずに初志を全うすること、何ごとにも疑問をもって思考し、探究し、討議するように言っていた。父は私ども兄妹が成長してゆく過程に於いて、その年齢に応じて物事を分かりやすく用例をあげながら物語のように話してくれた。また川の流れのように停滞することなく、不断の努力を重ねながら前進してゆくように、とも教えてくれた。

また毎夕、晩酌しながら色々の実例を挙げて現実の問題とも照合させて話してくれた。子供たちへの教育は非常に合理的で厳しいところもあったが、一緒によく遊んでくれたし、花見や散歩や映画などにも常に行動を共にくれた。帰ると必ず感想文を書かせられて、それらを丹念に見てくれた。これは私の子供の頃からの作文の練習になったのではないかとも思われる。

明治四十年、数え年十九歳の時、単身渡米し、大正十三年に帰国した父は「東京朝日新聞」の「アサヒグラフ」に入り一時「大阪朝日」へ転勤になった時、芦屋で三女の私が生まれた。その直後に東京の朝日新聞社から「週刊朝日」の編集長として呼び戻された。この頃多くの文壇人たちとの交渉があり、その前後には「中央公論」、「改造」、「新潮」、「解放」、「文学時代」などに数十編の小説や評論などを掲載、その多くがアメリカ時代の体験で、所謂「移民地文芸」といったものだった。これらは一部の文芸批評に載せられたが、昭和初期の頃からの軍時体

制は対米感情の悪化からアメリカ的なものは親しまれなかった。

しかし父は、日米関係の悪化をもう一度客観視しようとして「朝日」を辞めて世界漫遊の旅に、当時日本画壇で不遇だった竹久夢二を引き立て昭和六年五月アメリカへ向かった。しかし夢二は悪興行師に脅され、純粋に応援していた父を裏切ったため父の目指した世界漫遊の壮途は破鏡に陥り、さらに父は「日米」の労働争議にも巻き込まれて、朝日退職金はみな使い果たしてしまった。アメリカに一年ほど滞在して昭和七年五月に帰国した。それらについて自著『夢二と久允　二人の渡米とその明暗』（平二十八・四　風間書房刊）に私は書いている。

その年の十二月、東洋精神探求のためアジア諸国を縦断して印度に渡り、詩聖タゴールを訪ね、さらに釈尊を中心とした仏跡を一周して昭和八年四月八日に帰国した。

再渡米以前のことだが、東京の「朝日新聞」社時代の「週刊朝日」の編集長の頃の昭和五年六月十四日に新潮社から『十三人倶楽部新作小説集第一集』を刊行した。この時の父の作品は小説「彼らの一群」であった。この「十三人倶楽部」は昭和初期の新興藝術派運動として近代文學史上意義があった。彼ら十三人中に川端康成氏がいた。その頃の川端氏から父あての書簡がある。「東京麹町有楽橋際　朝日新聞社週刊朝日編輯部　消印昭2・8・24　翁久允様」とあり

拝啓、その后は御無さたいたしました
甚だ突然乍ら短い小説一節買つていただけませんでせうか
明日頃、持参お願ひいたしたく存じますが、一寸前以て手紙でお願ひいたします

二十四日

川端生

翁様

とあって、同人の十三人は一年一回ずつ新作集を出版する予定だったが、第一集限りで分散してしまった。その頃の日本は戦時下に向かい、五・一五事件以後は軍部の弾圧も目立ち、自由とか民主の思想を提唱するものは影を潜めざるを得なかった。

若い頃から日本を客観的に眺めていた父は、この非常時下にあって祖国の本質、日本の文化と文明の展開について考え、これまでの作家生活を翻して昭和十一年、日

本精神の源流を求めて郷土研究に打ち込もうと発心して郷里の富山に帰って郷土誌「高志人（こしびと）」を創刊した。

時代は戦時へ向かい、昭和十七年十二月勃発の大東亜戦争は激化してゆき、「高志人」創刊から昭和二十年三月三十日に富山へ家族と共に疎開するまで、父は東京と富山の半月ずつの生活を続けていた。「高志人」創刊後の十年近くは郷土研究を表看板にしながら、比較的自由なことを書いたり、発言したりしていたが、戦時の弾圧が日々加わり、遂に統合の名のもとに「高志人」は廃刊同様の憂き目に会った。憲兵や特攻には父の書いたものの真髄など理解できなかったようだったが、終戦と共に言論は自由になり、「高志人」は復活し、父は再び自由に執筆できるようになった。

終戦間際はさながら半病人同様だった父は戦後になって生き返ったように元気を取り戻した。それがやがて父の独創的とも言うべき三尊道運動へと展開してゆく。それは戦後の日本及び日本民族の道標として真（釈迦）・正（不動）・愛（観音）の実践を目指す運動であった。これは人間関係の理想を示したもので、三人がそれぞれ真実、正義、愛情の精神で交際すれば不和も不快もなく安静に過ごせるという人間の生き方が父の念願であった。

元来、無欲だった父は八十歳になったとき「高志人」の三尊道運動の存続は「高志人」会員たちのお蔭だと考え、更にまたこれからの子供たちは世界のため、人類のために貢献し得る日本人になって欲しい、それには自由に研究するための資金が必要だと考え、その資金を得るために『稚翁曼荼羅行』を書き始めた。父は自らを七十歳で「太稚」、八十歳で「稚翁」と号した。この「曼陀羅」は十四面の画帳で、釈尊一大仏跡諸集その他、仏典による諸仏で不動尊、観音は勿論中国の諸高傑、日本では親鸞、道元、日蓮、西行、良寛、それから富山に於ける万葉足跡など、父は実際にそれぞれの人々の歩いた所を辿ってスケッチし、その中にその人たちの姿を父なりの創案で描き、父独自の筆法で単彩の絵と字を書き残した。その一冊は三万から三万五千円と評価され、三百数十冊を三年間で書き上げ、昭和四十五年の秋に完成した。その集まった一千万円を基金として父は「高志奨学財団」という財団法人を設立した。その基金を底辺として将来の日本民族の雄飛をエネルギーにしようと念願した。このあと父の一万数千冊の蔵書を、富山市立図書館に寄贈

して公開し、そこで「稚翁」の晩年は終わって、最後に「稚仙」と改称した。

そこへ持ち上がったのが『翁久允全集』刊行の話だった。家族や近親の人たちは、この歳になって無理は禁物だと危ぶんだが、十数年前からヨガ行法を毎日やっていた父は、見たところ元気そうで曼荼羅を描いていた頃は絵遊びを楽しむようで、ますます健康そうだった。そのころ「日本経済新聞」（昭四十五・三・三）に父の署名の「三尊像にかける命」に「描いた三千体、画帳売って奨学金に」とあり、その内容について「わが庵は瞑想の場」・「運命を決めた放校」・「渡米、文学運動へ」・「諸行無常を悟って」・「特高の目ごまかす」とあり、この記事は全国的に反響を呼び、いくつかの注文があった。これを完成するには十年以上かかると言われたが、意外に早く終わった。

その後すぐに『翁久允全集刊行会』が創設され、着手した父は毎朝四時に起きて「全集」の編集や校正に取り組み、入院しつつも全集十巻中五巻までを完結させた。ところが昭和四十八年二月十四日、話しながら忽然として消えるようにして急逝した。

突然のことながら「全集」の六巻以降は「高志人」の会員たちの協力も得て私と甥の須田満の編纂により昭和四十八年十二月に完結し、わが社青林書院から出版した。「高志人」終刊号（通刊三百九十九号）の「翁久允追悼号」は四十九年三月に高志人社から出した。

②　母と父

母キヨの二十三回忌の昭和四十八年二月十四日に父が急逝し、父の死の二十三年前の昭和二十六年一月七日に母は他界している。母は死の前年の十一月、突然の脳溢血から半身不随となり、富山市内の不二越病院に入院し、十二月十日に退院して新築途上の現在の富山市内にある安野屋のわが家へ移って新年を迎えたが、一月七日の七草の朝この世を去った。この母あってこその父の人生は自由に生き、さまざまなことを成し得たと言えようか。

母は富山出身、現在の滑川（なめりかわ）市の高月（たかつき）にあった大きな肥料問屋に生まれ、三人の兄と二人の姉と妹一人だったが、両親は早世したため、早くから兄たちと店を切り盛りをしていたせいか、当時の女性にしては珍しいほどの

太っ腹で、鷹揚、その上、クリスチャンだったせいか、人のため常に尽力していた人だった。父は在米中の明治末から大正にかけて一時帰国し、その時、母を知り、結婚して父は帰米し、母は舅に仕えた後の大正四年に単身渡米し、大正十三年に父と共に帰国した。

まず想い出されるのは、在米十八年後の父は再度の渡米後の渡印後の昭和九年三月には大森区（現大田区）鵜の木に百八十坪の土地を購入し五十四坪の平家を建て「弟鳥荘」と号した。ここに於いて父は初めて自由人となって、創作に専念しようと決意する。

その翌年に伊豆大島の三原山行者窟（ぎょうじゃくつ）を紹介する要請に応じて一巡、そのあと役行者（えんのぎょうしゃ）の道場だった大峰山（おおみねさん）の研究のために山伏姿で三週間の大峰修業を成し、吉野から熊野まで歩行、そのためか熊野で体調を崩し、白浜で保養し、大阪、京都を経て帰京した。そのあと役行者研究や山岳仏教や本地垂迹説の文献などを探索し研究していた。このように日本の神社仏閣の由来や日本史などに熱中した後、再び健康を害し、一時保養のため母キヨの兄がいる岐阜の高山へ行き、そこで郷土研究家の福田夕咲氏を知って郷土研究誌の意を固め、著名な柳田国男氏から郷土研究誌創刊の賛意を得て、昭和十一年九月二十日、前述した郷土誌「高志人」を創刊した。

このような父の生きざまを見ると、家庭の主人としての生活から外れて思いのまま自由に生き、励み行動してきたように思われる。それは常に母の経済的な支えがあったからで、それが当然のことのような家庭であった。その中で生活してきた私は時折不審に思うこともあったが、生活費はどこからくるのかとも気付くこともなく、母の大らかな性格は金銭面での愚痴は一切言わず、ゆったりとした生活態度であった。

その根底にあった父への母の支えを今になって想い出す。それは母が着物について実に詳しい人で、いつも丹後の呉服屋さんが色々の反物を背負ってやって来ていたことが思い浮かぶ。母は非常に交際範囲が広く、世話好きで人の面倒もよく見て、困った人を助けて上げたり、来客は絶えず、わが家は賑わっていた。その中で母は人知れず呉服の商売で生計を立てていたものか、それを表面には一切言わず、交際範囲は広く、優しい母を慕ってくる人達とのごく自然な交際の中で商売は成されていたものか。また時折母は真夜中、床の中で算盤をはじいて

いる姿も見受けられた。その頃の私は無意識のまま、母の姿を眺めていただけで、母一人で金銭面での苦労をしていたのであろうが、母はそうしたことを人には一切言わず悠々自適な生活者としての姿のみが思い浮かんでくるのである。

母はいつも「高志人（こしびと）」について「高い志を持つ人」の雑誌として高く評価していて、父に対しては非常なる尊敬の念を抱いていた。私が初めて「高志人」に掲載した「太宰治の『斜陽』を讀んで」（昭二十三・九）を始め、〈俳句〉「『探梅行』の中の四句」、「故郷に帰って」（昭二十五・四）を非常に喜んでくれたことも、これらを限りに他界してしまっただけに涙と共に想い出される。母はいやなことは一切父には告げず、父の文才を何としても自由に伸ばして上げたいという切願こそが母の生き甲斐だったように思われてならない。

終戦の二か月前の六月に東京の家に残してきた物を母と姉が取りに行った時、父に関しての移民資料の殆どが運送で運ばれ、衣類は一切入れずに在米中の父の自筆原稿や掲載記事や書物のみで、これらは今日の父の「移民地文芸」研究に於いてもっとも貴重な資料の数々であったことも、母に心から感謝したい。

③　父から受けた恩恵

（A）　卒業論文は「高志人」から「与謝野研究」へ

昭和二十五年の三月、早稲田大学文学部の旧制二期生として国文科を卒業し、二十八年に大学院を終えた。学部の卒業論文には「みだれ髪と晶子の研究　みだれ髪評釈（一）（二）」（四百字原稿用紙八十六枚・百九十五枚）を提出した。此の頃は『みだれ髪』についての資料は手許で容易に見られなかったので父の友人の歌人尾山篤二郎氏を父からの紹介で金沢文庫のお宅へ毎週通ってご意見を伺ったり、その頃の図書館は上野にあって頻繁に通ったりして、未熟ながら卒論を仕上げた。

この頃の私の苦労を父は察してか、卒業後の私に『みだれ髪』だけではなく、晶子の研究を『高志人』に書いてみたらどうかな」という、思いがけぬ父の言葉を受けた。その時の私はただ〳〵度肝を抜かれる思いだった。その頃の私は「研究」そのものについて未だ何の知識も

なかったので、何となく慄然としたが、その一瞬、「これこそが文学愛好の新しい出発なのかな」と思ってこれまでの「高志人」掲載のものなどを読み返してみた。その時から父の意向に添って僭越ながら「晶子研究」に着手しようかと思い至った。

その後父はさらに「題をつけて連載して見たらどうかな」とも助言してくれたことによって、卒業した昭和二十五年から「高志人」に「与謝野晶子研究」十五回（昭二十五・七～二十八・三）の連載をはじめ、さらに「与謝野晶子研究ノート」四十一回（昭四十・二～四十五・二）を連載するようになった。その他に随想として『高志人』と父を憶う」（昭四十四・三）を書き、連載の「わが半生」二十三回（昭四十五・五～四十八・二）を書いたが、これが「高志人」掲載の最終となった。

このように卒論の書き直しではないが、父の励ましによる「高志人」連載は「晶子研究」の出発になったと言えようか。その頃は高度成長期の途上にあったせいか、「浅間嶺」、「形成」、「青雲」、「明日香」、「青遠」などの歌誌に発表の場が十分にあり、「与謝野研究」はどんどん前進していたように思われる。これも父の「高志人」が土台にあったことと父の励ましの言葉によるものと思い、感謝している。また父についての連載は、富山の「つむぎ」十三回（昭五十・八～昭五十三・十一）、神奈川の「焔」四十四回（昭五十一・八～平十一・四）などにもあった。

（B）　父の言葉―「勉強は生涯つづけてゆくもの」

昭和四十四年に、日本の女子大学の中で実践女子大学に初のドクター（博士課程）が設立された、そのとき当時実践女子大学教授だった恩師塩田良平先生から「博士課程の第一号に君を推薦したい」というお言葉を電話で受けた。余りにも唐突なことで早速夫に相談したが、「早稲田の大学院を出ているのに、今さら何を言うのだ」と言って、全くとり合ってもくれなかった。そこですぐ富山へ電話して父に一部始終を伝えると「勉強は生涯つづけてゆくものだ」と言って、翌日、早速私の姉を上京させ塩田先生宅に私と共に訪ねさせ、大学院について詳しく聞き、その内容と父の意志を姉は夫に詳しく伝え、また父からも直接電話で夫に頼んだようで、やっと夫の許可を得た。試験日にはマスターやドクターの受験者が多

かったが、ドクターの合格者は二人だけだった。その中の一人となった。その頃の早稲田の連中は「旧制大学院を出ているのに今さら何故」と言って蔑視していたようだったが、平安朝文学の岡一男先生だけは「もう一度基本から勉強をやり直ししなさい」と喜んで賛成して下さったのは有り難かった。夫の反対を押し切ってのことだっただけに家事との両立は困難だったが、常に父の言葉に勇気づけられていた。

一方で塩田先生のご師事によりこの頃から鉄幹と晶子の「評伝」も書き始めていた。その二年後の昭和四十六年十一月二十八日の塩田先生の御急逝は私にとってこの上ない悲運となったが、十年近くかけて昭和五十年四月、明治四十三年までの『評伝　与謝野鉄幹晶子』（七百十一頁）を八木書店から刊行した。これは寛の渡欧以前まで、「評伝」の前篇であり、これは塩田先生の御意向に添ったものであった。この著書に対して女子大学の初のドクターコースの第一号が昭和五十二年三月二十日、実践女子大学から私に授与された。

それ以前の昭和四十七年秋、入院中の父を見舞って、翌四十八年刊行予定の「評伝」出版を父に告げた時、非常に喜んで富山で出版記念の祝をしようと言ってくれたが、その翌年の二月十四日に父は忽然と急逝してしまった。この自著を誰よりも父に讀んでもらいたかった。このようにこの自著も学位も父の励ましと協力によって実現したのだと確信して、父に対し心より深謝している。

④　青林書院倒産の頃の父の想い出

わが社青林書院は創立（昭二十八）後八年経た昭和三十六年九月十六日に倒産した。その追想を「高志人」に連載し、また随想『女ひと筋の道』（昭五十六・五　オリジン出版センター刊）にも書いている。夫は父と同じ富山県人だったこともあってか、倒産前後に流れた青林書院とわが夫についてのいろいろの噂が父を悩ませた。そのこともあってか、父は一人息子の慎一を連れて私が富山へ帰ってくることを計画して門の横の敷地に三畳と六畳の部屋に炊事場をつけた一軒家を建て、私の就職先までも心配していたようであった。当時は児童誘拐の事件が頻繁にあって、倒産直後のせいか、慎一誘拐の噂もあって身の危険を感じて慎一を父と姉のいる富山の家に一

か月ほど預けていた。その直後の話で、そのあと慎一を連れ戻すために富山に行った時には、父は私が富山に戻ってきたと思い込んでいたようであった。その話を父から聞いて夫に相談せねばと言って父の好意を有り難く受けただけで慎一と共に帰京した。

この父の好意を、混乱状態の中にいる夫には言えず、父には「どうあっても夫には言えない」と願って、拒否の手紙を書き送った。父は私の気持ちを理解してか、それ以上は何も言わなかったが、慎一を連れて帰る時に父は何も云わずに封筒に五万円を入れて無言のまま私に手渡した。昭和三十六年の頃としては大金だった。その後も父は何度も電話で励ましてくれた。その頃のことを慎一がよく話してくれたが、富山に預けられていた間、父は外出する時いつも慎一と手を繋いで優しく、いろいろの話を楽しそうにしてくれたことなど、祖父との想い出を語っていた。

⑤　父の意志による絵から国文学へ

私は幼少から絵を描くことが好きで、よくキューピーや人形の絵を鉛筆で描いて色をつけて楽しんでいた。女学校の頃には暇を見ては方々へ絵を描く仲間と水彩道具持参でスケッチに出掛けた。それが楽しく、また学内の美術部でも活躍していて、部内の展開会には多くの絵を出品していた。その頃わが家には在米時代からの知り合いの画家の彦山さんが居候していたので、私の絵をよく指導してくれた。そのうえ彦山さんは絵を描く基礎的な勉強として石膏を描いてデッサンを教えてくれた。このように絵の方に心が向いていた。

ところが、ある日父に呼ばれて書斎へ行くと早速、「家にこれだけの沢山な本があるから，絵より文学の方へいったら、どうかな」と静かに口ずさむように言われた。不意の言葉に即答もできず暫く無言のままでいた。その時ふと女子美へ通学中の姉の日本画を想い出していた。父はさらに色々の全集のあることや古典、近代の歌集、詩集、小説のあることなどを語って「これらを勉強してもらいたい」とも言う。余りにも唐突な方向転換の話で即答できぬまま立ち去って暫く考え込んでいた。

思えば、父との想い出には文学に関わることが余りにも多かったことから、姉とは違った方向へ進むのも面白

いかなと思ったりして、父と散歩しながら口すさんだ歌や詩について思い出したりしていた。その中で父が在米中に求めた晶子の歌集『火の鳥』を父から贈られて読んだ時の感動も浮かび、ふと絵を描くことは止めて、国文学への移行が迫って来た。

それからが大変で、国文入試のための塾に通ったが、戦時中の昭和十八年の受験率は国文科は三十人に一人、英文科は二人に一人の割合だった。そんなことから東京女子大の国文科には入れず、青山学院の女子専門部入学、その後は他大学の講義をも聞いたりして国文の勉強に励み、戦後になって早稲田大学に入り卒論に『みだれ髪』についてを書き、父の「高志人」から出発した「晶子研究」は他誌へも移って、方々への「与謝野研究」連載が著書となって今日の研究に辿りついたのも父の一言によるものだったと回顧している。これまで父について多種多様に書いてきたが、未だ書き足りないことも多々あるのを心に秘めて大切に守ってゆきたい。

父について前記した『夢二と父』は平成期に書いたものだが、それ以前の父についての著書には『わが父翁久允―その青少年時代と渡米』(昭五十三・六　オリジン出版刊)・『在米十八年の軌跡　翁久允と移民社会　１９０７～１９２４』(平十四・十一　勉誠出版刊)・『資料　翁久允と移民社会　〈1〉移植樹　翁久允著　逸見久美編』(平十九・十一　大空社刊)があった。最後の父の研究として甥の須田満と共編の父の「年譜」と「書誌」完成を大空社刊行として待つばかりである。出版間際に満のインターネットの恩恵により、父の在米時代の未発表の作品や生(なま)の原稿が現在のアメリカから続出したため、その整理に追われ、その上コロナによる弊害もあって益々遅れ、生存中に必ず果たされることを念ずるばかりである。

もう一つ今年で二十年目の『鉄幹晶子全集』四十巻(二〇〇一～二〇二一刊)も同じコロナ被害で勉誠出版刊行を待つのみ。それ以前の講談社版『与謝野晶子全集』二十巻(昭五十六)。二人の書簡集は八木書店刊の「天眠文庫蔵」一巻(昭四十八)と「書簡集成」四巻(平十五)。二人の歌集全釈に鉄幹一冊、寛二冊、晶子六冊。二人の「評伝」二回(昭五十・平二十四＝明治、大正、昭和篇)、更に私の歌集刊行と父の研究も含めて二十五冊の著書刊行が、これ迄の私の人生の歩みの一部分だったと言えよう。

翁久允「安孫子久太郎翁と私」
―自筆原稿の翻刻と解説

須田　満

はじめに

本稿は、日米新聞社社長であった安孫子久太郎（一八六五―一九三六）の伝記を出版しようと考えた在米の岡繁樹（一八七八―一九五九）からの依頼で翁久允（一八八八―一九七三）が一九五六年九月に執筆した三十一枚ペン書き原稿[一]「安孫子久太郎翁と私」の初めての翻刻と註釈である。

安孫子久太郎は、新潟県水原（すいばら）村（現・妙高市）で生まれ、一八八五年、二十歳でサンフランシスコ福音会の援助で渡米し、新聞経営と同時に日本人移民の永住を目指した農業コミュニティ作りを目指した人物である。

岡繁樹は、高知県安芸（あき）町（現・安芸市）生まれで、一八九九年「萬朝報」に入社し、幸徳秋水、堺利彦と知り合い、一九〇二年に渡米。サンフランシスコで金門印刷所を経営する傍ら、平民社のメンバーとして在米社会主義者の拠点[二]となった。第二次世界大戦中は、日本人収容所に入ったが、一八年にアメリカ政府の要請でインド・ビルマ戦線へ行き、ビラを巻いて日本軍の降伏工作を行った。

翁久允の最初の渡米は一九〇七年でありワシントン州のシアトルやブレマートンで学僕（スクールボーイ）をしながら邦字新聞に小説や評論を発表していたが、一三年に一時帰国して結婚した翌年からは定職を求めて南下してカリフォルニア州サンフランシスコ周辺のコミュニティでの生活を開始し、雑誌や新聞の編集に関わりながら著作の幅を広めていった。一五年に開催されたパナマ・太平洋万国博覧会の前後に翁は二人と知り合うことになった。

久允は、安孫子の追悼文「安孫子さんの思ひ出（一）～（四）」を日本から「日米」[三]に寄稿し、また岡繁樹の追悼には『井伊大老』と其著者の思い出」[四]を書いており、二人との深い交友があったことが判る。

本原稿に関して、久允は一九五六年九月六日付の「太稚庵日誌に〈「安孫子久太郎」の原稿〉と題して次のよう

に記している。

在米の岡繁樹が日米新聞社長だつた「安孫子久太郎」という本を出すので、それに交友及感想を書いてくれと原稿用紙をおくつて来たから早速書き出し三十枚ばかりでまとめる[五]

また本原稿の最終ページには、次に引用する岡繁樹宛の手紙が添え書きされている。

岡繁樹君

原稿用紙が届けられたので、十月頃に出版ときいていたし、おくれると迷惑されるだらうと思ひ、早速書き出したが、まとまりもつかないようなものになつた。

しかし、私の見た安孫子久太郎として一隅にのせてくれ玉へ

本が出來たら一部おくつてくれ玉へ

他からもいろ〳〵の見方が届くであらう。しかし、書くような人々が多く亡くなつた。

記事中まちがつたところでもあれば訂正して下さい。

九月八日、

十月十一日着[六]

本原稿を含む岡繁樹が依頼した『安孫子久太郎』用の原稿は、岡の病気と五九年の死によって公開されることがなく、岡の死後カリフォルニア大学ロサンゼルス校図書館に寄贈され Shigeki Oka Papers, 1914-1957(*sic.*)[七]として保管された。

その原稿の存在を広く知らしめたのは、岡繁樹の甥でカリフォルニア・ファースト・バンク日米資料室室長であった岡省三が、一九八〇年に叔父繁樹が残した資料を基に「在米日本人の今日あるを夢見その生涯を捧げた先覚者　安孫子久太郎伝」及び"Biography of Kyutaro Abiko: Issei Pioneer With a Dream"を「北米毎日新聞」[八]に連載したことによる。この評伝には本稿原本の一部が引用されている。

岡省三の評伝の存在は、翁久允の英文評伝[九]の著者である鳥本幾子氏からのご教示、本原稿の複写物は水野真理子氏からご提供、また翻刻作業には、逸見久美氏から助言をいただいた。各位に感謝申し上げる。

表記について

本稿では、原則として原本の記載、形式をできる限り再現した。原本が執筆された一九五六年頃は新旧仮名遣い、新旧漢字が混同していた時代であり、翁久允も新仮名遣い、新漢字で書こうと試みているが、結果として混同が生じている。本稿では、仮名や漢字の新旧のいずれかへの統一は敢えて行わず、原本表記を優先した。

一　漢字は、旧字体のものも含めて、フォントの可能な限り原本記載の通り表記する。

二　変体がな・漢字で難読と思われるものや越中人である翁久允の「い」音と「え」音の混同と思われる部分には［　］内に仮名を付した。

三　かな遣い、送りがな、拗音・促音の表記は原本記載の通りとする。ただし濁点がなく難読のおそれがある場合は濁点を補う。

四　おどり字は、原本記載の通りとする。

五　振りがな・傍点・傍線は原本記載の通りとする。

六　補いうる脱字並びに空白箇所、補足事項は［　］で補う。また、単純な誤字と思われるものには、ママを附す。

七　筆者には判読不能な文字は、□とする。

（文中には、今日の人権意識に照らして不適切な表現がみられるが、時代背景や記録の性質、著者や登場人物が他界していることなどを鑑み、原本通りの記載とする。）

安孫子久太郎翁と私

翁久允

千九百十五年、桑港［サンフランシスコ］に世界大博覧會一〇が開催されると言ふので、その頃までシヤトル二にいた私達にハ桑港は大きな魅力であつた。そして遂にその魅力に誘ハれて私も南下したのだが、第一に訪ふたのハ新世界新聞一一の松原木公一三君であり、次ぎに日米新聞の山中曲江一四君であつた。二人ともシヤトル時代の先輩で、木公さんは新世界の、曲江さんは日米の主筆であつた。何よりも最初に感じたことハシヤトルに比べて桑港の同胞社會ハ老成していたことであり、それだけ日本化し、そして風俗習慣にも日本的情實が濃厚であつた。それハカリフオルニヤ州全体の同胞労働者農民の年齢ハシヤトルを中心と

したワシントン州よりも十五年乃至二十年ほど高く、そして布哇[ハワイ]移民が多かつたから農園の地盤などハ北方よりも堅く、その為め排日の嵐が強く、排日問題の中心地でもあつたからである。だからシヤトルから見ると苦労人型の人が多いように見受けたが同時に文化程度と言うか知識程度というか、さういつたものがシヤトル地方の連中より低いように受取れた。

桑港にハ御三家というものがあつて、それは日本を背景とした一大勢力で、卽ち総領事館、三井物産、東洋汽船會社[一五]の三代表者であつた。あとから正金銀行[一六]なども同格になつたが、これらの殿様的な存在は加州同胞を領民的に見下ろしていた。かうした日本の封建的な感情を色づけたグループを背景として在米日本人會は加州各地域の日本人會を統一していた。そしてその會長はポテト・キングの牛島謹爾[一七]であつた。牛島はバークレーに豪壯な邸宅を構え、スタクトン河下の開拓者として全米的に著名な人物であつたし在米同胞社會から見ると傑出[ずぬけ]した成功者あつた。彼は「別天地」[一八]と號して漢詩を嗜[たしな]み、その詩篇を蒐[あつ]めて上梓[一九]したほどだから思想的にハ全く東洋人であつた。風貌も立派であつたし、ジョウジ・シマと言つたら米人と相併[あいなら]んでも遜色がなかつた。総領事館ハ勿論のこと御三家御四家とハ密接な関係があり、在米日本人會は、だから日本のスパイでないまでも、日本の御用機関化していた。それハ會長牛島の人柄に適していたものであつた。

ポテト・キングであつた牛島謹爾は同時にジヤパニーズ・キングでもあつた。日本からの高名な陸海軍大將格や総理大臣以下の大官を初め大實業家、学者、其他當時の欧米視察者もしくハ研究家でこの牛島謹爾を訪[とぶら]ハないものハ殆どなかつた。しかし、彼らハ牛島と接してその尨大な農園を見せられたり、邸宅で晩餐の歡迎を受けたりはしたけれど、日米関係や日本移民の運命や、排日問題への對策やについては彼から何をも聞くことが出來なかつた。さうした問題について是非逢つて見なければならぬ人物ハ他にあつた。それは日米新聞社長安孫子久太郎[二〇]であつた。

在米日本人會長など言ふ位置は當然この安孫子久太郎のような人を据えておくべきであつたが、彼にハ據大な理想があり、思想が進歩的であつた為めに所謂御三家や、そして布哇移民的保守系にハ餘りにも飛躍していた為め、

一般的にハ容れられなかつた。しかし、進歩的な青年達ハ安孫子の膝下に集つた。日米新聞はその為め發展し、新世界新聞ハ創立が古るかつたけれど逆にこれに及ばなかつた。この二つの新聞の流れが加州においてハ對立の姿となり、あとから多少の変化があつたけれど日米新聞は反御三家的となり、新世界は支持派となつた。

反御三家的な思想ハ當然反日本的に解された。安孫子ハクリシチヤンであつた。そして在米の保守的移民の多くハ佛教徒であつた。そして在米日本人會を初めとして各地域日本人會の幹部級ハ殆どこの佛教徒的保守派で占められていた。これに反して基［督］教徒でなくても進歩的な青壯年達ハ議論は上手であり、筆も達者であつたが、實力的にハ佛徒的保守派に叶はなかつた。世界のどこでも人情ハ一つで、金のある方へは愚象がついてゆくものである。安孫子久太郎の日米新聞は發展して行つたが社長自身はいつも貧乏だつた。その貧乏も日米の財政から言つたら貧乏な筈がなかつたのだが、理想家であつた彼ハ金が出來ればいつもそれの二倍も三倍もの計画を立てるのであつた。それハ私慾的なものではなく、日本民族將來の發展と言つたところに眼目があつた。

恰度私が南下した千九百十五年の二年前は日本人土地所有禁止と言つた排日法案[二]が制定され、それの實施前にリビンクストンの荒野を買ひ込み「ヤマト・コロニー」[三]と稱して所謂新らしい村作りの計画をたてゝ進歩的な青壯年を選んで開拓さしたのであつた。かゝる計画ハ當時の御三家的な、そして保守的な在米移民の頭には無鐵砲なことであつた。彼らハ日米戦争を豫想していたし、又米國へ來たのハ稼ぎに來たので永住するつもりハなかつたのであつた。しかし安孫子ハ米國へ來た以上は米國の土と化する。そして日本民族の根をはやすと言ふのが考え方の基本であつた。

牛島は土地を借りて農園を開拓し、それで儲けて富を作るというのが主義であつたが、安孫子ハ土地を自分のものにしてそこに根をおろす。その為め十年内外ハ苦労せねばならぬ。苦労を凌（しの）いだら他日必ず成功者となれるという主義だつた。が、最初ハその説に惚れ込んで青壯年達ハ入植したが中々終りを完了せ得なかつた。中途でボロ〳〵かけて行つたり、又堪えられない苦労に悩んだ結果安孫子を恨む聲も出て來た。さうなると、「それ見たか」と借地で一時的な百姓をやつている人達や保守的

な人達からハ嘲(あざ)けられた。そして世界大博覽會が桑港にあるという華やかなその年でも、安孫子の財政的窮狀ハその極にあつたのであつた。しかし、彼ハその窮狀をオクビに出さなつかつた。そしていつも楽天主義を振り舞いていたのである。その餘りにも楽天的なのに彼の膝下に集まつた有能な青壯年達の中でも見切つて日本へ歸つたり、他に轉じたりしたものがあつた。

私ハ初めて安孫子久太郎という人物に逢つたのハ山中曲江夫妻と共に一夕晩餐に呼ばれた時であつた。若い時には何でも働らいて來たと言つたような大きなガツチリした手で私の手を握り、柔和な笑を両眼の目尻に湛(たた)え、口髭も頭髪も半白になつた小肥りの堂々たる偉丈夫的な紳士であつた。そして夜更くるまで大和植民地(ヤマトコロニー)論を聞かされたのであつた。シヤトルの書生生活から、初めて桑港に下つて來た私にハその所論や趣旨ハよく呑み込めなかつた。しかし山中曲江ハもう六七年も前から來ているのだから、社長の理想とするところが解つていたし、それに共鳴して毎日の論説なども書いているのだから、私のわからないところを補足してくれたりした。何かしら、私はこの人物にハ尊敬すべき大きなものがあるような感じをもつてわかれ、そして加州でハ最初の職業地であつたスタクトン[二三]に行つたのであつた。

スタクトンに佐伯便利社[二四]というのがあつて、新世界の松原木公の推薦でその社が出版している「太平楽」[二五]という雜誌の編集者としてやつて來たのであつた。佐伯社長[二六]ハ鄉里廣島で印刷所をもつており、そこで發行する雜誌を加州に散布している廣島縣人[二七]に賣り込む為めアメリカで編集すると言つたものであつた。そこへ行つてみると、サンオーキン河の所謂河下というところはポテト・キング牛島の大農園であつた。ところが、その河下の一部に農園を経営していた林甚之丞[二八]と言ふ短身小躯(ちいさい)ではあるけれど、この地方の進歩的、文化的な青壯年の中心となつている人に逢つた。彼ハ安孫子久太郎黨であつた。そこで日米支社や、教會を中心として私達が一つのグループをつくつた。そうしたグループをたどつて桑港からいろ〳〵な人がやつて來たが、それが所謂日米系の人達だつた。だん〳〵わかつて來たことは、シヤトル時代にハ殆ど觸れていなかつた思想回訪が加州の

一部に潛行的だつたことであつた。シアトルの若い連中は文学的だつたが、桑港を中心とした加州は文学的と言ふよりか思想的だつた。それハ幸德秋水[二九]とか片山潛[三〇]とか河上清[三一]などの影響があつたのである。そして安孫子さんハ社會主義者ではなかつたが、彼らの進歩的な議論を容れていたのである。だから彼らの出入りも許していた。さういう雰囲氣が、保守派方面から疑の目をもつてすると、安孫子一派というものハ祖國に反逆心でも抱いているように見えたのであつた。

當時在米同胞社會にも日本のスパイ的な存在があつて、社會主義的傾向のあるものを密告して彼らの何かの為めにしようとしていた。それによつて日本でハブラツクリストが作られ、総領事館から各地の領事館へ手配されていた。安孫子社長はその統領のように沙汰されていたのであつた。しかし、安孫子自身にも、彼を中心とした進歩的な青壯分子にも祖國への反逆心どころか、只管[ひたすら]日本民族の海外發展策が眞劍に考えられていたのであつた。とかく日本人は内地でもさうだが、進歩的な思想をもつたものをすぐ國賊的に判断する頑迷な保守性があつた。在米同胞社會でのさうした一黨と言ふか一派と言つたものハロクに英語もしやべれないし、英字新聞さへ讀めない連中で、日本の講談本を耽讀したり、日本からおくつてくる新聞や雜誌しか讀んでいなかつた。そして物の考え方ハ日本中心主義で、世界と言つたものに目を開かうとしなかつた。さういつた意味で安孫子久太郎は彼の時代の同胞中でも米人と膝を交えて自由に會話することも出來、いつも進歩的な英書や雜誌などよんでいた。家庭でも余奈子夫人[三二]ハ津田梅子女史の妹さんであり英語は自由であつた。米人の有名な牧師や学者や政治家などが來て講演などやる時ハ夫婦で必ず聞きに行つた。桑港にハそんな家庭は一つもなかつた。

安孫子さんハ所謂親日家と稱する米人の實業家や政治家や其他の人々と交際ハしていたが、その人達に心服はしていなかつた。それハ彼らハ日本と結んで何かの利益を得ようとしているものか、たゞ漫然と日本が好きだと言つた贅沢な連中だつたからであつた。だから彼ハ寧ろ排日政治家と往來して彼らの意見を質するに努めていた。そして排日家の言ひ分にハ米人としての眞劍さがあり、彼らの說を理解して日本及在米問題が反省すべきだと言うのが結論であつた。さういう議論や態度と言ふものハ

頭から排日家だと言えば敵視したり、彼らの議論を理解しようとしない連中にとつては國賊的に見え、又スパイ的に見えたのである。しかし、安孫子さんハ日本の政治が墮落し、外交に方針なく、たゞ軍部が威張つてるだけの狀態に對しては眞面目な憂慮を抱いていたのであつた。だからと言つて日本に革命を起こすような運動をやらうなど言ふ氣もちがあつたのでなく、在米同胞ハさういつた祖國にたよらないで、在米同胞自身の手によつてこの移民地で成功し、移民地を植民地化すべきだ。在米同胞が日本を賴つているから排斥されるので、米國に同化したら農園經營でも各種の労働でも他民族より優れている日本人だから必ず排斥を喰えとめることが出來る。それをやらねばならぬと言ふのが持論だつたのだ。

ところが在米同胞の大部分ハ相変らず出稼[でかせぎ]根性であり、永住の觀念がなく、儲ける金ハ正金とか住友其他の銀行機関を通じて日本へ送金し、殘つた金で生活しているから同胞社會の日常生活は貧弱であり、それが排日の種ともなつた。日本でハ米國での稼ぎ金を少しでも送らせようとしており、そして諸銀行の支店がその手先きとなり、領事館などハ在米同胞の為めになることよりも、日本の利益になること以外何も取扱ハなかつたのであつた。それが安孫子さんの不平であつた。日本人會ハさうした領事館を中心としてその下部的なものに化していたからさうした機関にハ最初ハたずさわつていたが遂にハ顔出ししなかつた。そして牛島謹爾を中心として旧態依然とした日本人會が續けられたのであつた。

私ハスタクトンにいて時々桑港にゆき、又林甚之丞君などを通じて加州の同胞社會の實情をあらまし知り得た。スタクトンから一時間餘りの電車でサクラメントに行けたが、その中間にフロリン[三三]と言ふ村があり、この農地は日本人土地問題で騒ぎを起こしたところだつた。サクラメントは州廳のあるところで、その市や河下地方を中心として三四千の同胞がいた。スタクトンよりも多かつた。そこに日米新聞の支社があつたが、鷺谷南强[三四]という人が長をしていた。彼ハ安孫子幕下の偉才だつたが、前に言つた思想的に密告され、幸德秋水一派のものとされた。祖國の官憲筋が彼の身元を調査するやら内偵するやらし、それが日米新聞、强いてハ安孫子社長の身邊にも累を及ぼすと言つたほど緊迫して來たので彼ハ桑港からメキシコに飛んだのであつた。當時メキシコには内亂

が起こつていたが彼ハカランザ將軍[三五]の幕僚となつて活躍をやつていたが、病を得て歸つて來たのだ。歸つてハ來たが元の日米本社に行くと前の関係もあり、と言つて安孫子社長ハ彼を何とかせねばならず、そしてサクラメントへ廻はしたのだが、彼ハさうした來歴の持主であるから一般同胞から見ると頭拔けた風格をもつていた。頭腦ハ明晰であり筆力も爽かであり、話術にも長けていた。日米支社を中心としていろんな連中が集つたが、その中でも鷲津尺魔[三六]と言ふ偉丈夫があつた。彼ハ安孫子久太郎と同縣の新潟人で、安孫子の性格ハ呑み込み、文章が達者で、多くは安孫子の代筆をやつていたが、何處で勤めたと言ふこともなく、何を働らいたと言ふ形蹟もなかつたがいつも酒に浸つていた。そして暇と相手さへあれば碁を打つていたし、それでいて何處へ行つて[も]尺魔尺魔と言つて人から慕はれ、金に窮したら安孫子から貰つていた。南强ハ尺魔のようなだらしなさは少しもなく、常にネクタイをきしりとしめ服裝なども整えていた。日米本社ハ山中曲江によつて編集はガツチリと固められ、各地域の支社ハそれぞれ傑出した人物を配されていたから日米新聞の勢力は桑港世界博以來同胞社會に大きな地盤を作り出した。

それは千九百十五年から七八年かけての時代で第一次大戦の眞最中であつた。日本ハ聯合軍として米國と結んでいたから排日運動も鳴りを静めていた。その間に日米新聞ハ益々發展したが、當時朝鮮とか満洲などにも日本の新聞社[三七]があつたが、さうした海外同胞社會の新聞としてハ日米は信用の上からも財力の上から第一位と稱せられていた。安孫子社長ハ人生として働らき盛りの頂上に來ていた。そして彼の願望であるリビングストンの大和植民地を完成しようとあせり初め、其他各方面に手を伸ばした。それハ日米の財政から見ると無理な計画ばかりであつた。しかし社員ハ社長の理想を完うさせようとして忠實に働らき応援したが、戦争も終り、再び排日運動が抬頭して來て社長の意図が狂ひ初めて來た。

私はスタクトンからオークランドの日本人會幹事としてやつて來たときハオークランドの支社長をやつていたのハ島内逆浪[三八]と言うた佐賀人で日露戦役のときハ中尉とか大尉とかだつたと言う硬骨漢で安孫子の參謀役だつた。彼ハリビングストンの外にソーテツ植民地[三九]を始めたので社長の理想を實現すべく去つたあとへ私に來て

くれと言うことになり引受けたのだが、桑港とハ一幕［衣］帶水のところだから、安孫子さんハ暇がありさへすればやつて來て夜が更けてもストーヴの前の安楽椅子に腰かけて氣炎を上げて行つた。いくらきいても盡きない彼の話題であり、結局ハ日本民族發展策であつた。理想論が焔々述べられて限りがないのだけれど、安孫子さんのやつて來た動機は金策であつた。しかし、その金策のことを少しも言ハないで氣炎が終ると歸つて行くのであつた。

正金でも住友でも其他の金融機関的なものに對してハ安孫子さんハ常に例の理想論を說くものだから誰も相手にしなかつた。彼に敬服し彼の理想のわかる者にハ金がなかつた。そして彼ハ誰か金を出すものがないだらうかと方々飛び廻つた。少し位の金でハ燒石に水なのである。そして彼の生活は質素そのものであり、洋服などもプレスはしているが何十年も着たりしたものだつた。

餘りに金に困つて來たから、私は毎年出版している日米年鑑四〇と言ふものゝ外に「在米同胞人名辭典」四一と言つたようなものを作つたらどうだらうかと提案した。そしてその計画をたてゝ報告したところ社員の多くハ最初反對だつたが社長はやれ〳〵と言ふものだから遂に決行したら相當の利益を得ることが出來た。そこでワシントン會議四二が催されることになつたので私ハ特派員四三としてゆくことになり、社長もあとからやつて來た。ワシントンでハ德川公爵四四を初めとして全權の加藤友三郎四五、幣原四六、植原四七の大使、総領事、そして日本からやつて來たいろ〳〵人物と面會したが、安孫子さんの態度ハそれら高官や紳士達と對して何らの遜色がなく、米國の事情に通じていない彼らに怒々とそれを說くのであつた。在米同胞社會でこのような態度を持し得る人ハ外になかつた。牛島謹爾さんにしても、富豪としての態度ハ持し得たかもしれぬが知性の點でハ及ばなかつた。

安孫子と言つたら米國にいる危險人物だと多年睨んでいた日本のその筋の疑問はこの頃から薄らいでいた。安孫子さんハ明治十八年代に渡米し、日露戰爭前に一度歸つて結婚し、再渡米して以來亡くなるまで歸らなかつたのは、安孫子が歸つたらひつ捕えようとまち構えていた警察があつたからであつた。

日米新聞の財政ハ行きつまつてゆくと、多年安孫子の幕下にいた青壯年の霸氣ある人々は自然と散り散りにな

つた。社長の理想實現の困難に挺身しようとする氣力も失はれて來たのであつた。又、長ずるに及んで意見も合はなくなつて來た。そして有為な人物ハ彼の膝下から去り、多くハ歸國した。私ハ最後まで社長と運命を共にする覚悟でいたけれど関東大震災の翌年四八、父が大病だから歸れと音信され、一時的なつもりで歸國したのだつたがそれきり日本にとゞまることになつた。

八年の後四九、私ハ朝日新聞社をやめてアメリカからヨーロツパを廻り、印度を経て歸つてくる計画で画家の竹久夢二五〇をつれて桑港に上陸した。二人で世界漫遊と繪と文の著書を出版する豫定だつたのである。久しぶりで先づ安孫子さん夫妻に逢つたのだが大いに喜んでくれた。そして社員の多くハ変わつていたが、中には古參も殘つていたけれど八年前と内部の雰囲氣が殆ど変つていた。同時に同胞社會も変つていたし米國そのものも以前の如くでなかつた。私の在日八年間ハ大震災後澎湃[ほうはい]として起つて來た東京を中心としての民主主義運動からプロレタリヤ運動が熾烈となつて來、マルクスの書物が賣れ、優秀な学生らが左翼思想に走つた。普通選挙となり政黨内閣が出來たけれど原敬暗殺後の政界は動搖し、そして政黨の墮落腐敗が叫ばれ、一方右翼団体と軍部の結びつきが夕立雲のように擴まり初めた。満洲事変が起きて來なければならぬ一歩手前と言つた頃で、プロレタリアの運動ハ彈壓に彈壓を加えられていた。

さうした日本の内情から見ると在米同胞社會ハ呑氣な社會であつたが、しかし、思想的な雜誌や宗教書などは若い人達に讀まれていた。日米新聞にも労資争議が起つて來たのであつた。労資争議と言つても日本内地のようなせち辛らいものでなかつた。最初ハ四至本八郎五一と言う編集局長を中心とした人事問題から起つたのだが、當時の日米財政ハ混乱もしていた。私が歸國してから渡米したような若い記者達は日本のプロレタリヤ運動の洗禮を受けていたが、私の居た頃から引續き在社していた古株の記者や社員達にハさうした争議ハ争議でなく、單なる感情のもつれであつた。安孫子社長ハ社會主義者でなかつた證據に、さうした争議に對する見通しも意見もなかつた。それぢや資本主義者かと言ふと强慾な金溜め主義者でもなかつた。たゞ晩年の事業として青年時代から描いて來た理想を實現しようとアセる餘りに余裕のない財政から無理な金を引き出したことが社員の反抗を招い

て來たのであつた。

私は竹久夢二と桑港をきりあげることが他の事情から少し延びたので、久しぶりでもあつたし旧友達をあちこち訪ねていた直後一ケ月程にこの事件が起つたのだ。その間、日米社の旧友とハ懐旧の情を溫め、新らしい人達にハ先輩としての歡迎を受け、すつかりいゝ氣もちになつていたのであるが、いよいよストライキ断行と言うことになつて來て社長ハちよつと來てくれと言つて來た。行つてみると社内にハ社長側にたつものと、反社長側と分れた對立だつたが、どちらにもそれ〴〵の理屈があるわけであつた。新聞社の新聞が出なくなつたら新聞社の價値がなくなつて來る。それを出すにハ人であるし、金であつた。方々に借金のある社だから、さうなつて來ると誰も口でハ甘いことを言つているが、いざとなつて出してくれるものハなかつた。しかし安孫子久太郎と言つたら在米数十年、人格者として尊敬されて來た。彼ハ非難される何物ももつていなかつた。何かあつたとしたらそれは彼の理想がいつも高く愚象の上にあつたから、彼らの見解で彼是いうぐらいで安孫子自身省みて何らやましいところがなかつた。さうした彼に對して平常一度も交際したことのなかつた保坂[五二]と言ふ人が数万弗の金を投げだしてしつかりやつて下さいと彼を訪問した。味方を得たので、新聞を再刊し、そして争議者との紛争を調停する為め是非ともしばらく留つてくれと私ハ懇願されたのであつた。もう六十才を越した老社長の今まで見たことのない弱りきつた表情を見ると、私ハ私の目的を犠牲にしても、何とかして働いてあげねばならぬといふ氣になつた。そして竹久夢二とは外のことで面白くないことがあつたので二人ハ袂を別つことにし、それから満一ケ年に渡つてこの争議に巻き込まれたのである。

この事件を書き出したらキリがないが、誰か外に書く人もあるであらう。ともかくも私ハスタクトン支社をやつていた遠藤照治[五三]君と協議して田舎を廻り、あちこちから金を借りて、どうにか斯[か]うにか新聞を出すようにしたのであつた。そして、今までハ安孫子個人の新聞社であつたものを株式會社にし、もうこれで一安心と言ふことになつた頃ハ私の欧州行旅費ハすつかりなくなつていた。そして、ひとり淋しく日本へ引き返して來たのであつた。

其後の安孫子さんハ奮起して人員を整理したり余奈子

夫人も直接出社して経営に當つておられたようであるが、自動車事故があつたり、老境に入られたので往年の氣力もなく、言はば、薄命の中に晩年を終られた。

安孫子さんはどつちかと言ふと世俗の人から非難された人であつた。又世の中にハ少し傑出した人の惡口を言うことは自分の賢さを見せることだと思つているものもある。さういう連中ハ盛んに安孫子、安孫子と言つて攻撃していた。彼らの惡口の多くハ彼らの創作し又ハ妄想したもので、安孫子さん自身とハ縁の遠いことが多かつた。私もさうした惡口を盛んにきかされたものだが、どう觀察しても安孫子さんにはさうした人々のいうような生活がなかつた。若い時代ハどんな人であつたか私ハ全然知らないが、しかし鄕黨であり若いときから晩年まで何かにつけて安孫子さんに纏はりついていた鷲津尺魔なども、時々無心のアテが外れて一杯飲むと惡罵などやつたけれど、それハ一時的な激昂からで本心は安孫子さんに敬服し、誰か彼を非難でもすると眞向きになつて弁護に努めた。鷲津尺魔と端々ハ違つていたが、これも安孫子さんに一生を託したと言つたような島内逆浪など、生活の困難さから、支給の不充分を中心として不平を鳴らすこともあつたが、いざ安孫子の身邊に何かゞ起るとか安孫子攻撃が初まりでもしたら眞つ先に駆けつけると言つた人であつた。結局、安孫子中心に集つた人々は、年を経るに隨つて生活も發展してゆくが、献身的に働らいた割に物質的な酬(むくゐ)えが尠なかつたと言ふのが、安孫子さんからだんだん遠ざかつてゆくようになつたように思ハれた。それでいて日米新聞社に関係している人達ハ新世界とか其他で働らいでいたものよりか、ずつと好遇であつた。しかし、働らいている人々は皆なが皆さうハ思ハなかつた。職工などは何十年と日米社だけに働らき、多額の貯金をしたものも尠くなかつた。不平兒というものはどこにでもあるもので、さうした人々ハ別として、私自身安孫子さんを顧みると、あの人ハ自分の名誉とか蓄財とか言ったことで事業をやらうとか社員の給料を吝(おし)むとか言つた人でなく、會計に金が餘つておればどれだけでも出す人であつた。しかし、その金をあの人は夢の世界に描いていた在米同胞發展という理想の事業に前後のわきまへもなくもち出して行つたのである。

安孫子さんハ求道人であつたし、先駆者でもあつた。しかし、事業家でハなかつたようである。彼自身事業家をもつて任じていたわけでなかつたようだが彼の理想を實現するには事業をやらなければならなかつたのだ。そこに安孫子さんの悲劇があつた。若い頃に何か事業を起し、銀行などをやつて失敗したという話は、いつも攻撃の材料になつていたが、それもあの人ハ計画的に世間を欺かうとしたのでなく、事業を違つただけであつた。その根本思想にハ在米同胞の發展策があつた。

安孫子さん達が渡米した明治十年代ハ在米同胞社會の第一期であつた。そして二十世紀初頭から日露戦争前後の渡米者をもつて第二期とするなら、私などの年輩はそれに屬するのである。第一期時代に渡米した日本人にハ志士的な人や、功名心に燃えた人が多かつた。そして多くハ一二年、長くても三四年で歸國し、日本で旗上げした。實業界に政界に花々しく活動した人達ハ安孫子さんと若い時代の友達が多かつた。言はゞ有名な諸人物ハ祖國で旗上げしたが安孫子さんはたゞ一人踏みとゞまつて、自分の独力で日本人の眞價を發揮しようと決意したのであつた。日本に歸つた人々は洋行歸りと言うのでもて囃(はや)され、その活動の舞台が自ら展けて行つた。だから安孫子さんから見たら「あの男が」と思ハれるようなのが忽ち有名人になつていた。彼ハさうした人達のように名誉とか富貴の舞台に花役者たらうという芝居氣が更らになかつた。クリスチヤンであつた安孫子さんハ朝夕の食事にハ常に祈りを捧げていた。彼ハ殉教者の傳記を好んで讀んでいたし、人の為め、世の為めに生き拔くのだと言ふ熱情を最後までもつていた。しかし、彼の理想ハ餘りにも高かつた為め、彼を眞に理解する後輩をその跡に据(す)えることが出來なかつた。

日米新聞社ハ最後の争議で紛糺するまで、幾多の有為な人物を出した。そして移民地に於ける日本人社會に大きな使命を果たした。たゞそれだけで終つたら安孫子久太郎ハ世俗的にハ輝きある人であつたけれど、新聞経営を踏み台にして事業を計画し、それが成功しなかつたところに悲劇があつた。しかし、安孫子久太郎は先駆者だつた。今日、その心血を漑(そそ)いだリビングストンの大和植民地やコーテツ日本人コロニーは安孫子の理想を實現しており、加州の日系人農園の方向ハ安孫子の指導精神を具体化しているのだ。そして彼ハ戦ひ且つ親しんだ排日

家達も安孫子の當時説いたところに來ているのである。

世俗的に言つたら日米新聞社長としておさまつていたら安孫子さんも楽して食つてゆけたのに、だつたが、私ハさうした安孫子さんであつたらこんな思出も書かないであらう。安孫子の眞價ハ貧乏をし通したことであり、そして朝夕同胞發展の為めに神に祈つていたことであり、在米數十年間一弗の無駄金を使はなかつた。青年時代に買つた一弗時計（ダラーワッチ）を最後までもつていた。自分が困つていても憐れな人があつたら、懐中にあるだけのものを出していた。

岡繁樹君ハどつちかと言ふと安孫子さんとソリの合はない方の人であつた。その岡君が「安孫子久太郎」を編纂して後世に殘すと言つて來た。そしてこの人の傳記を作ろうと思つたが事蹟が断片的で纏らないからとも言つて來た。安孫子さんハ自分の傳記など殘さうなど考いたこともなかつたらう。鷲津尺魔老でも在世中だつたら多少系統だつたものも作れたらうと思ふが、私などの印象も断片的である。牛島謹爾氏とか其他在米関係の人で傳記的なものハあるようだが、如何なる人よりも傑出していた人ハ安孫子久太郎だと私ハ思ふのである。この人を知つている人の多くハ歸國した。そして死んだ。在米人で彼を尊敬していた人達も殆ど死んだ。そしてあの人ハ新聞には殆ど何も書かなかつた。しかし論説や記事などをよく讀み、自分の意見に添はないときハ編集長を責めていた。が、寫眞結婚問題で日米ハ激しくたちあがつた時、記者達が餘りにも意氣込んだ為め、自分が言ひ出したことでもあるし困つておられた氣の弱さと言つたような顔が今でも浮ぶ。

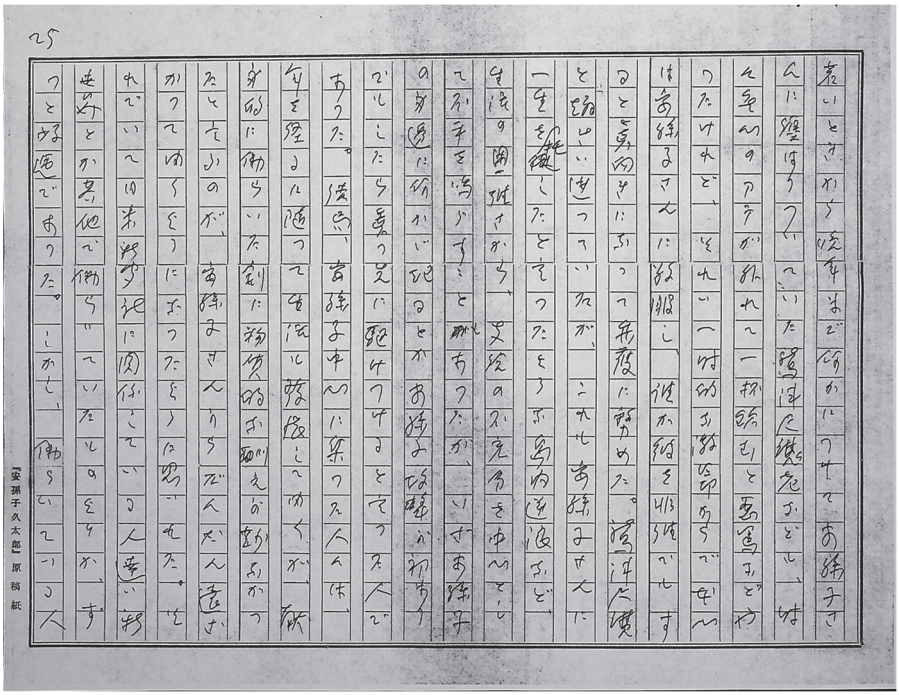
安孫子さんが世俗からかれこれ言はれたことハその信念が強かつたからであつた。それでいて人間としてハ氣の弱いところもあつた。

私ハもつと纏つたものを書くつもりであつたが時間がなかつた為め以上の書き流しになつたことがわれながら殘念である。そして瞑土の安孫子さんに對しても申わけがないと思ふ。と同時に岡繁樹君の俠氣に敬意を拂う。

（富山市安野屋町五四）

1915 年頃の翁久允と妻キヨ

安孫子久太郎家族　久太郎　長男・康雄　余奈子



25

【安孫子久太郎】原稿紙

「安孫子久太郎翁と私」の原稿

註

一　四百字詰の原稿用紙の左下に〈『安孫子久太郎』原稿紙〉と印刷されている。

二　加藤哲郎「反骨の在米ジャーナリスト岡繁樹の１９３６年来日と偽装転向」（「インテリジェンス」第４号　紀伊国屋書店　二〇〇四）

三　一九三六年八月二十三日～二十六日の第一面

四　岡直樹・塩田庄兵衛・藤原彰編『祖国を敵として』（明治文献　一九六五）

五　「高志人」21巻10月号　p. 54

六　到着日付は岡繁樹の加筆と推定される。

七　"UCLA Library Special Collections, Charles E. Young Research Library" の "Shigeki Oka Papers"　"Box 133, Folder 4 Manuscripts"　" 9. Okina Hisamitsu [sic.] Abiko Kyutaro o to watakushi [sic.] [Abiko Kyutaro and I], Tokyo, [1956]. In Japanese. 31pp."

八　邦文は一九八〇年五月八日～八月三十日、英文は同年九月三日～十一月一日まで掲載。

九　Ikuko Torimoto: *Okina Kyūin and the Politics of Early Japanese Immigration to the United States, 1868-1924* (McFarland & Company, Inc., 2017)

一〇　サンフランシスコ万国博覧会(Panama–Pacific International Exposition) 一九一五年二月二十日から十二月四日まで開催。久允は同年三月二十日に春陽丸で来米した妻キヨ（一八八六―一九五一）をサンフランシスコ港に出迎え、翌日博覧会を見物。同船には、二百人以上の花嫁たち、所謂写真結婚者が乗船していた。なお、本稿における年譜的事項に関する記載は、別記がない限り逸見久美・須田満編『翁久允年譜　１８８８―１９７３　第三版』（公益財団法人翁久允財団　二〇二〇）に拠る。

一一　久允は、一九〇七年五月十五日に横浜港を出発し、五月三十日にシアトル港に入港した。

一二　一八九四年五月二十五日にヘイト青年会のメンバーが創刊したサンフランシスコの最古の邦字新聞。新聞名は「新世界」、「新世界日日新聞」（一九三二―三五）に変更され、「北米朝日新聞」との合流後、「新世界朝日新聞」（一九三五―四二）となった。

一三　まつばら・もっこう　本名：傳吾（一八八四―一九五九）宮城県生。一八九七年シアトル上陸、「中加時報」「北米時事」記者の後、一九一三年から「新世界」の主筆。一七年帰国後、報知新聞に入社、パリ特派員、外報部長を歴任。久允は、「過去帳」に松原との思い出を綴っている。（「高志人」25巻８月号 pp. 47・48）

一四　やまなか・きょっこう　本名：仲二（一八七八―一九三二）埼玉県吉川町生、一九〇三年シアトル上陸、一一年日米新聞社入社、主筆兼編集長、欧州特派員を歴任。二七年帰国、衆議院に立候補を考えるも病気で断念。

一五　浅野総一郎（一八四八―一九三〇）が一八九六年に創業した船会社。サンフランシスコ航路を開設したが、一九二四年施行された

排日移民法の影響もあり、経営悪化に陥り、二六年旅客部門を日本郵船に譲渡し貨物船専業となるも六四年解散。

一六　横浜正金銀行、一八八〇年設立、通称は正金（しょうきん）。外為業務中心に発達。一九四六年、ＧＨＱにより解体され新設の東京銀行（現・三菱ＵＦＪ銀行）の前身となった。

一七　うしじま・きんじ　幼名：清吉（一八六四―一九二六）　筑後国三潴郡鳥飼村（現・福岡県久留米市）生、一八八八年サンフランシスコに上陸、スタクトンの荒地を開拓してジャガイモの生産に成功。一九〇八年創設された在米日本人会の初代会長に選出される。

一八　牛島が師事した漢学塾二松學舎の三島中洲が令名した農園「別天地園」による。

一九　久允の蔵書を収める富山市立図書館翁久允文庫には、『別天詩稿』（和装　出版社不明　一九二五）と『別天詩稿　完』（日東之華社　一九二五）が所蔵されている。

二〇　久允は、「牛島翁と安孫子さん」（「日米」一九三一年十一月十二日・一面〔沿岸太平記（55）〕）の中に〈この稿を書いてる今日（九月五日）私は「別天詩集」をカバンに入れて來なかつたことを遺憾に思ふ。それは、別天翁の詩には、人間としての牛島謹爾氏の風格が目に見へるやうに浮んでくるからであつた。私はいつかの機會に、この海外同胞の先驅者である翁に對する感想を新にして諸君に見（まみ）へたいが、こゝへ翁を引き出したのは、安孫子さんに缺けたところのある性格の美はしさを言ひたいのである。〉と記している。

二一　「カリフォルニア州外国人土地法」（ウェッブ法案）California Alien Land Law of 1913 (Webb–Haney Act)は、一九一三年にカリフォルニア州議会で可決された主に日系人らアジア系移民の土地所有及び三年以上の賃借を禁止した法律。

二二　一九〇三年に安孫子久太郎らが設立した日米勧業社が、〇六年マーセド郡のヤムとアトウォータの中間地点にあるリヴィングストンに一二八〇エーカー（一五八ha）の土地を購入した。日本人の定住計画の一つとして集団移住による農業入植地の建設を計画して、日本人入植者を集めた。「Yam」と「Atwater」をつないで発音すると「Yamato」に近い音になるので「ヤマト」と名付けられた。（川井龍介：〈「ヤマト」と名のつく小学校がある米国の町 ―〝理想〟の日本人コロニーが生まれた、リヴィングストン〉ディスカバー・ニッケイ（http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2013/9/20/yamato-colony-1/　二〇二一年三月八日閲覧）

二三　カリフォルニア州サンホアキン郡の郡庁所在地

二四　「たった80年、ずっと挑戦」（広島朝日広告社のホームページ https://www.hiroasa.jp/rinen.html　二〇二一年一月二十五日閲覧）に拠れば〈創業者の佐伯卓造は17歳で単身渡米し、10年もの間、語学を学びました。／その後、米人弁護士の通訳を請け負う傍ら、銀行から麦酒会社、生命保険会社や通運会社など多岐に渡り、日本人のための代理店として活躍しました。／一九一三（大正2）年、そんな卓造が日本に帰国し、地元広島にて始めたのが、当社の前身にあたる佐伯便利社です〉とあるが、一九一〇年十二

月二十四日付「新世界」6面に次の広告がある。〈今回左の處に櫻府と連絡し便利舍を設置し左の事務を至極叮嚀に廉價を以て御依賴に應ず可く候▲英文飜譯▲代書▲リースの鑑定及び交渉▲賣買周旋▲送預金取次▲貸金督促▲通辨事務▲手紙電報の取次　須市東ラフエット町四四　廣島旅舘の隣　佐伯卓造 44 E. Lafayette St.〉

二五　佐伯便利社が一九一四年一月に創刊した雑誌。同年五月シアトル在住だった久允は、スタクトンに転居して同誌の編集に携わることになり、佐伯卓造がサンフランシスコに転居する十二月まで深く関わる。同年一月號から十一月号までは、天理大学附属天理図書館の所蔵で内容を確認できるが、新聞広告に掲載された一五年一月、二月、三月、五月号、「臨時増刊　大博紀年号」は未見で内容確認できない。同年四月に佐伯が帰国した後は実質的に終刊になった。

二六　さいき・たくぞう　広島市生（一八八二―一九七六）。本稿執筆中に卓造ご令孫の佐伯正道氏、佐伯祐司氏より卓造の除籍謄本の写、自伝的文章「明治のアメリカ」（掲載誌不詳）のコピーをいただき感謝する。

二七　竹田順一『在米廣島人縣人史』（ロサンゼルス　在米廣島人縣人史發行所　一九二四）、再版『初期在北米日本人の記録・第十一冊』（文生書院　二〇〇三）には「太平楽」や佐伯卓造に関する言及はない。

二八　はやし・じんのじょう　北海道生（一八八四―一九六〇）。スタクトン近郊のウッドワード島で農園を経営、一九一二年スタクトン日本人会会長、一六年日米新聞社スタクトン支社主任。帰国後、日本レール㈱を設立、四四年日本鋼管鉱業㈱社長、戦後は同社会長。『林甚之丞氏の足跡』（同編輯会　一九六一）に久允は「林甚之丞のこと」〔二　アメリカ時代〕を掲載している。

二九　こうとく　しゅうすい　本名：傳次郎（一八七一―一九一一）大逆事件で処刑された一人。

三〇　かたやま・せん（一八五九―一九三三）片山は、一八八四年から九六年、一九一四年から二一年と二度滞米している。久允は、富山中学校を放校された後に片山の『学生渡米案内』を読んでいる。

三一　かわかみ・きよし　山形県生（一八七三―一九四三）一九〇一年に渡米して生涯アメリカで過ごしたジャーナリストでキリスト教社会主義者。

三二　あびこ・よなこ　東京生　旧姓：津田・須藤（一八八〇―一九四四）父津田仙、母初子の五女として誕生し、一八九〇年須藤家の幼女となる。一九〇七年姉津田梅子と欧米一周旅行をした時に安孫子久太郎を知り、〇九年結婚、久太郎の死後日米新聞社の発行人を続ける。久允は「与奈子」と誤記したが訂正。

三三　久允は、妻キヨの妹石川フサ夫婦がフロリンに住んでいたので、一九一七年に居住したことがあったが、長女三千子が亡くなったこともありオークランドに移住した。

三四　さぎたに・なんきょう　本名：精一　新潟県生（一八八一―一九五九）日米新聞記者。メキシコ特派員も務め一九二〇年に帰国し、

日米新聞東京支社長。帰国前に久允に預けられた鷺谷が筆写した幸徳秋水らの獄中文が、四九年に「高志人」（14巻2月～4月号）に発表された。

三五　ベヌスティアーノ・カランサ　Venustiano Carranza　（一八五九―一九二〇）メキシコ革命の指導者の一人。一九一一年国防相、一五年大統領

三六　わしづ・しゃくま　本名：鷲頭文三　新潟県生（一八六五―一九三六）　一八九四年渡米、桑港時事社に入社。ユーモア雑誌「腮（あご）はづ誌」を創刊。「ジャパンヘラルド」「日米」「新世界」の記者となり、一九〇二年サクラメントに日米新聞社支社設立。二二年在米同胞歴史々料編纂会を設立。鷲頭尺魔の名で『在米日本人史観』（ロサンゼルス　羅府新報社　一九三〇）がある。

三七　スタンフォード大学フーヴァー研究所は、〈邦字新聞デジタル・コレクション〉をインターネット上に開設して、世界中の日本語新聞をＰＤＦで公開している。https://hojishinbun.hoover.org/

三八　しまのうち・ぎゃくろう　本名：良延（りょうえん）（一八七七―一九四三）。一九〇九年渡米、翌年日米新聞社に入社し、ワトソンビル、オークランド（久允の前任）、フレズノの支社主任、羅府日米新聞社主筆、本社総務部勤務を歴任し、退社後在米日本人会事蹟保存部主事を務めた。ユタ州トパーズ収容所で病死。（島内憲：「フェアネス」を至上の価値とする米国、霞関会　二〇二一年二月五日公開）。長男・敏郎はロサンゼルス総領事、ノルウエー大使を務め、孫・憲はブラジル大使を務めた。

三九　カリフォルニア州マーセド郡コルテス（Cortez）。「コルテス」は岡繁樹による加筆。リヴィングストン、クレシー（Cressy）に続き安孫子久太郎が一九一八年に開拓を始めた三番目のコロニーで、『在米日本人史』（在米日本人会　一九四〇）によれば、島内良延が総支配人を務め、半年間に三十邦人家族に土地を分譲した。本植民地に関しては、Valerie J. Matsumoto : *Farming the Home Place: A Japanese Community in California, 1919-1982* (Cornell University Press, 1993)に詳しいが、本書には植民を勧誘した島内への言及はない。

四〇　日米新聞社が一九〇五年に第一巻を『在米日本人年鑑』として創刊し、第五巻以降『日米年鑑』として一八年の十二巻まで発行された。（日系移民資料集　第三期）（日本図書センター　二〇〇一―〇二）として復刻されている。

四一　日米新聞社編『在米日本人辞典』（日米新聞社　一九二二）が久允を中心に編集された。『日系移民人名辞典（北米編）第1巻』（日米図書センター　一九九三）として復刻されている。

四二　一九二一年十一月十二日から二二年二月六日までワシントンD.C.で開催されたアメリカが主催した軍縮会議。

四三　オークランドを十月二十日に出発して十二月十八日に戻った。特派員として三十五回の通信記事を掲載した。

四四　徳川家達　とくがわ・いえさと　現・東京都生（一八六一―一九二三）　徳川宗家第十六代当主。貴族院議長として会議の首席全権委員。家達の生母・武子は田安徳川家家臣の津田仙の長女で、

高井主水の養女となった。武子の実妹の初子が安孫子余奈子の母親であるため、家達と余奈子は従兄妹にあたる。サンフランシスコ南の町サンマテオにある安孫子久太郎墓碑の篆額は家達の書いたものである。（村上有「安孫子久太郎・排日移民法と戦う」新潟新報社『続・越佐が生んだ日本的人物』　一九六五）

四五　かとう・ともさぶろう　現・広島県生（一八六一―一九二三）　海軍大臣、会議では首席全権委員。一九二二年内閣総理大臣になるも、翌年在職中に死亡。

四六　幣原喜重郎　しでばら・きじゅうろう　現・大阪府生（一八七二―一九五一）　一九一九年に駐米大使、会議では首席全権委員。

四七　埴原正直　はにはら・まさなお　山梨県生（一八七六―一九三四）　会議時には外務事務次官で首席全権委員。一九二二年に駐米大使。

四八　一九二四年三月二十四日、サンランシスコからホノルル経由で帰国。

四九　一九三一年五月七日横浜港を発ちハワイで滞在後サンフランシスコに到着したのは六月三日。到着日には安孫子久太郎主催の歓迎ディナーが開催された。

五〇　たけひさ・ゆめじ　本名：茂次郎　岡山県生（一八八四―一九三四）

五一　ししもと・はちろう　大阪府生（一八九一―一九七九）　一九一五年渡米、新世界新聞社入社、一九年日米新聞社に転ず。三二年帰国。『是でも米国か』（新光社　一九三二）等の著書あり。

五二　保坂光重　ほさか・みつしげ　山梨県生（一八九一―没年不詳）　一九〇三年渡米、クリーニング業を経営。日米新聞社副支配人となり破産手続きを進め、木村松南、翁久允と共に日米新聞社整理実行委員を務めた。

五三　えんどう・しょうじ　長野県生。一九〇四年渡米、農業に従事した後、一八年日米新聞社入社。二五年日本見学団主事。

五四　原稿執筆の一九五六年当時の翁久允居の住所表記は〈富山市安野屋町二三七〉で現在の表記は〈富山市磯部町一丁目一番一号〉である。

翁久允と富山
―『高志人』で目指した郷土研究

水野　真理子

一、はじめに

作家、ジャーナリスト、画家、宗教家とさまざまな顔を持つ翁久允（一八八八―一九七三）は、富山の偉大な文化人である。翁は幅広い功績を有しているが、その中で、『高志人』を創刊し、一九七三年までの三八年間、雑誌を発行し続け、郷土の文化研究を広めようとした点は、彼の富山における最大の貢献だと言えよう。『高志人』は、一九三〇年代から一九七〇年代までの富山を中心とする文化的事象や、文化人たちの人脈やネットワーク、活動に関する情報の宝庫である。近年では、吉井勇と翁の関係[一]、越中八尾民謡おわら保存会（以下、おわら保存会）との関わりや翁の果たした役割などの研究も進み[二]、翁が富山と東京を往復しながら郷土研究に力を注いだその時期の活動について、光が当てられ始めている。それらの研究に続き、膨大な情報量を有する『高志人』研究を、今後もよりいっそう進めていかなければいけないだろう。

そこで、本稿では『高志人』研究の出発点として、まず『高志人』創刊時から紐解いていきたい。創刊までの経緯や意図、また郷土研究として具体的には何を目指していたのか、これらの問題について考察する。

二、『高志人』創刊に至るまで[三]

二―一、国境を越えた翁の移動の軌跡

翁の人生は、富山から首都東京へ、そして西欧文化を体現するアメリカに渡り、さらにはアジア文化の源の一つでもあるインドを訪問、最終的には富山に回帰するという、国境を越えた移動を伴う多彩さを持っていた。その経験は、西洋哲学由来の「コスモポリタン」思想や現代において言及される「世界市民」概念に見られるような、世界規模で人類を捉えるという普遍的な側面も持ちながら、一地方から派生している翁独特の観念である「世

界人」「コスモポリタン（宇宙人）」思想を形作った。そして、その理念は『高志人』を発表媒体とした郷土研究の発案につながっていく。そこで、まず『高志人』を創刊する一九三六年までの翁の半生を辿っておこう。

翁は一八八八（明治二一）年二月八日、富山県上新川郡東谷村大字六郎谷村（現中新川郡立山町六郎谷）に生まれ、その後、一九〇二（明治三五）年四月、富山県立富山中学校（現富山県立富山高等学校）に入学する。しかし、一九〇五（明治三八）年一月、友人たちと寮の舎監に対して行き過ぎた悪戯を行ったことにより、放校処分を受け、人生で最初の挫折を味わうことになる。父の計らいで、進学の道を模索し、縁戚を頼って上京するが、当時の若者たちの間で流行していた、いわゆる渡米熱の中で、翁も文明国アメリカへの憧れと自分の将来への希望を抱き、アメリカ行きを決意する。一九〇七（明治四〇）年一九歳のときであった。

その後、翁は一九〇七年から一九二四（大正一三）年まで、約一七年間、アメリカのワシントン州シアトルやカリフォルニア州スタクトン、オークランドに居住し、新聞記者、移民地文芸作家としてのキャリアを積んでいく。青少年期とほぼ同じ年月をアメリカで過ごした翁にとって、アメリカはまるで第二の故郷のようになっていった。

その後、三六歳、一九二四年の三月、父の病状を慮り、家族とともに日本に帰国し、東京朝日新聞社に勤務する。一七年前とは様変わりした日本の都市の様子や、慣れ親しんだアメリカとの文化的差異にとまどいながらも、『週刊朝日』の編集を担当し、文人との交流も深めていった。また、アメリカ時代に執筆した作品を改作して発表し、日本文壇の中で、遅咲きながら実力派の異色な小説家として注目されていった。

一九三一（昭和六）年、四三歳のとき、友人の画家、竹久夢二の再起をはかるため、また小説の素材を集めるために、朝日新聞社を退職して再渡米する。当初はまず二人でハワイとアメリカを訪れ、夢二の描いた絵を、翁の在米時代の友人、知人などに購入してもらうことで、その後の経済的資金を作り、そして夢二の憧れていたフランスへと、世界漫遊旅行を実行する予定であった。しかし、滞米中に夢二との関係が決裂し、翁は一九三二（昭和七）年四月、一人で帰国した。その後、インド仏跡を

訪問したいという念願を叶えるために、一九三三（昭和八）年一月、上海、香港、シンガポール、ラングーンを経て渡印した。ノーベル文学賞受賞者のラビンドラナート・タゴールにも面会し、仏跡を巡礼して、東洋の文化について思いを馳せる。そして三か月後の四月、東京に戻った。

このように西欧文化を体現するアメリカ、そしてアジア文化の源泉の一つでもあるインドを訪問したことで、日本文化とは何か、そして日本の文化的位置がどこにあるのかを翁はより真剣に考えるようになった。その経験もまた、翁が郷土研究に関心を寄せる重要な素地となったのである。

インド旅行より東京に戻った翁は、一九三四（昭和九）年、東京の大森区鵜木（現大田区）に家を新築する。翌年、東京汽船会社専務の林甚之丞より伊豆大島の三原山行者窟の紹介のため、現地視察の依頼を受けた。当時、正力松太郎が社長を務める読売新聞が、三原山を取り上げたことで、三原山が注目を集めていたという。読売新聞による宣伝が三原山観光を促し、東京汽船会社の利益につながるため、林と正力との間で三原山観光へ力を入れることに合意がなされた。こうした背景のもと、翁は林を通じて視察を依頼された。伊豆大島を巡った後、よりいっそう役行者を知るため、役行者の道場だった奈良県大峰山での修行を敢行する。

役行者を主とした山岳仏教研究に加え、日本の神社仏閣や日本史の研究に打ち込み過ぎたこと、また次第に軍部の力が強くなっていく不安定な世相や、作品を売り続けていかなければ生計が立たない作家という職業に対する不安などのために、創作に集中できず、翁は体調不良となる。そこで、一九三六（昭和一一）年、四八歳のとき、静養のため、妻清子の兄石黒孝次郎が肥料商をしている岐阜県高山市へ向かう。そこで、石黒家と懇意にしていたという郷土研究家の福田夕咲（ゆうさく）（一八八六―一九四八）と、福田とともに郷土研究を盛り立てていた小説家江馬修（なかし）（一八八九―一九七五）と知り合ったことで、郷土研究誌創刊の構想が現実化していくのである。

二―二、郷土研究誌創刊の背景

以上のように、翁の人生の軌跡を辿り、郷土研究誌創

刊に行きつくところまでは確認した。それでは、さらに具体的に、どのような背景で翁は郷土研究誌創刊を実行していったのだろうか。この辺りの事情について、知りうる限りで記してみたい。

まず翁に重要な影響を与えたと思われる福田について見てみよう。彼は岐阜県高山町大新町（現高山市）出身で早稲田大学文学部在学中から詩を発表し、大学卒業後は読売新聞社に入社、文芸欄を担当した。一九一〇（明治四三）年には詩集『花のゆめ』を刊行している。一九一三（大正二）年に退職し、翌年、家庭の事情で高山に戻り、家業の漆器問屋や魚市場役員などの仕事で生計を立てる。そのかたわら、詩社や短歌会を結成し、民謡研究に力を注いで、郷土文化の高揚に貢献した人物である[四]。江馬とともに雑誌『ひだびと』で活躍している。

『ひだびと』は、江馬が一九三三年に創立した飛騨考古学会の機関紙『会報』（一号～二年一号）（一九三三年四月～一九三四年一月）、『石冠』（二年二号～二年四号）（一九三四年五月～一〇月）の後継雑誌であり[五]、三年一号（一九三五年一月）から一二年五号（一九四四年五月）まで継続した。三年一号の『ひだびと』によると、編集者は川上六兵衛、発行所は飛騨考古土俗学会となっている。また編集後記には、東京在住だった江馬が、再び飛騨に居を構えたことを機に、『ひだびと』の編集に専心してもらうことになったと記載されている[六]。

この江馬であるが、彼も郷土研究について翁にかなりの影響を与えた人物である。江馬は岐阜県高山市生まれ、一九〇六（明治三九）年に斐太中学校を中退後、上京し、田山花袋の書生となり、その後高山で代用教員となった。その後、再び上京して、神田区役所の臨時雇い、水道局製図係などの職につきながら小説を書いた。一九一一（明治四四）年「酒」（『早稲田文学』掲載）で小説家デビューした。一九一六（大正五）年、長篇『受難者』を出版し、一九二六（昭和元）年にはヨーロッパに渡り、帰国後はプロレタリア作家として活躍している。特別高等警察に逮捕、留置されるという苦しい経験も経た後、一九三四（昭和九）年に高山へ戻る[七]。帰郷後、郷土研究に力を入れ始めたようである。翁の一九三八年の『高志人』三巻四号に掲載された回想によると、一九三五年の冬、高山に滞在していた折に、江馬は翁に対して「長野県に『信濃』新潟県に『高志路』の郷土研究誌があるが、富

山県にも石川県にもそれがない。北飛騨を研究しやうとすれば、どうしても、越中、能登、加賀にゆかねばならぬ。それで、どうです君も一つ越中で研究誌を出しませんか、とケシかけて来た」[八]という。

福田や江馬が郷土の研究に注力したり、郷土を舞台とした創作を行ったりしたことは、民俗学研究の広まりとも関わっているように思われる。民俗学とは、農民や民衆など一般庶民の文化がどのように作り上げられ、発展してきたかを民俗資料にもとづいて研究する学問である[九]。柳田國男の活躍によって飛躍し、学問として確立された[一〇]。柳田は明治三八年頃から民俗学的発想が文章に表れるようになったと言われているが、その後約五十余年にわたり、柳田は民俗学を追及していく。翁が飛騨を訪れていた一九三〇年代半ば頃は、柳田の民俗学確立期とされている時期と重なっている。柳田は一九三四年には日本民俗学の初の概説書と言われる『郷土生活の研究法』『民間伝承論』を出版しており、さらに一九三四年から数年にかけて門下生を動員し、全国各地における大規模な民俗調査を行い、後継の研究者育成にも力を注いでいたようである。柳田のこうした動きからも一九三〇年代半ばには、民俗学研究が全国的にも広まりつつあったのではないかと考えられる[一一]。

そして、一九三五年の冬、飛騨での静養を終え、翁は飛騨から富山への文化的経路を辿りたいという思いのもと、白川郷から庄川に沿って進み、五箇山から城端に出て、そこから郷土研究の端緒を探りつつ、富山市内に入ろうと考えた。ところが大雪のため、その五箇山踏破は断念し、数日後、高山線で富山へ入ることとした。そして以前おわら保存会創立の際（一九二九年八月）に招かれた八尾に立ち寄った。そこで知人の川崎順二（一八九八―一九七一）、清水徳義、木村彦蔵と会い、彼らと民族や郷土について語り合ったという。また松本駒次郎（一八六〇―一九四九）の『八尾史談』なども入手し、翁の郷土研究への熱意は高まっていった[一二]。

ここからもわかるように、八尾にもすでに郷土文化に関心を持ち、独自に研究する人々がいたようだ。その中心的人物の一人が川崎である。川崎は八尾町東町に、代々医業と薬舗を営む由緒ある旧家に長男として生まれる。金沢医学専門学校で学び、自宅にて開業し医療に専念した。医学の道だけでなく、書画や漢詩を趣味とし、また

歌舞伎や文楽に心酔するなど文化に造詣が深かったという。おわら保存会の初代会長となり、生涯、おわら節の発展、保存に力を尽くした[一三]。翁が八尾の川崎のもとを訪れた一九三五年頃は、おわら保存会は創立後、約六年経ち、歌詞集『おわらぶし』の発行、漆器類、木工品などおわら節にちなんだ製品の制作や販売を行っていた。また懸賞付きで新作のおわら歌詞を募集し、さらには、大集団でのおわら節踊りを実施するなど積極的におわら節文化の発展と保存のために、保存会が活動していた時期であった[一四]。そうした活発な郷土文化保全の動きが、翁の郷土研究への関心に拍車をかけたと考えられる。

また翁が手にしたという松本駒次郎の著書『八尾史談』も、八尾町に見られた郷土研究を象徴するものであろう。松本は一八六〇年、八尾町東町で、種油、紙、小間物商を営む松本家の次男として生まれた。勉学を好み苦学の末、小学校教員となる。一九〇〇（明治三三）年、八尾小学校在任中に、郷土読本『八尾郷土史談』の編纂委員となり、これが後の八尾史編纂につながっていった。そして、一九二一（大正一〇）年頃から念願だった『八尾史談』の編纂に着手し、膨大な編纂作業を独力で取り組み、一九二七（昭和二）年一月、『八尾史談』が完成したという。翁がその大著を手にしたのは、完成後おおよそ十年が経とうとする頃であり、八尾を理解するための重要文献として、『八尾史談』は地元の人々によって重宝されていたことだろうと想像される[一五]。

このように高山、八尾の郷土研究家たちとの交流を経て郷土誌発行の意思を固めた翁は、富山に戻って、「第一番に図書館をたづね、越中研究に関する書籍とその系列を一通り菊森永造氏や増山茂治氏などから知らしてもらった」[一六]という。

その後、一九三六年には柳田國男と面会し、郷土研究誌を発行する旨を告げ、相談している。朝日新聞論説員であった柳田とは、翁が『週刊朝日』の編集を担当していた時期から親交があり、柳田から雑誌『郷土研究』（一九一三年創刊）『民族』（一九二五年創刊）を受け取り、民俗学について教えられたという[一七]。また、一九二八（昭和三）年の六月に、箱根湯本に建設された「花の茶屋」別館で、『文藝道』主宰の須藤鐘一が世話役となって宴席が催された。その会に翁は柳田とともに参加している[一八]。柳田の存在も、郷土研究へ向かう翁の背中を力強く後押

しったのであろう。

郷土研究誌創刊の意図を聞いた柳田はそれに賛同し、射水郡小杉町の漢詩人片口安太郎（江東）（一八七二―一九六七）を紹介したという。片口もまた富山の郷土文化と関わりの深い人物である。片口は射水郡戸破（ひばり）村（現射水市小杉）に、味噌醤油を製造する老舗の家に生まれた。幼少期より読書好きで中学校進学を望んだが、家業を継ぐことを父より切望され、進学を断念している。十代の頃と思われるが、小杉町に滞在していた漢詩人、木蘇岐山が創立した漢詩結社「月三吟社（がつさんぎんしゃ）」に参加し、漢詩の創作に励んだという。叔父の藻谷海東や、大橋二水、岡崎籃田とともに、越中漢詩壇の隆盛期を築いたと言われている。また、一九一九（大正八）年に小杉町長に就任し、一期目は一九二三（大正一二）年まで、その後一九二六（大正一五）年に再選、一九三〇（昭和五）年まで任期を全うした。小杉図書館や郡立農業公民学校（現小杉高校）の創立（一九一九年）に尽力し、教育振興に力を注いでいる。また小杉貯金銀行（のちの小杉銀行）を創設し（一九〇〇年）、町の産業発展にも尽力した人物である[一九]。翁が片口に会った際、片口は六四歳、小杉町の町政、産業、教育、そして漢詩をはじめとする文学の分野での実力者として著名な存在であった。

こうして、七月下旬、翁は『高志人』創刊の趣意書を二百人程の知人らに送り、賛意を得て、そして九月二〇日、郷土研究誌『高志人』を創刊した。郷土研究家の福田や江馬、八尾のおわら保存会の活動、川崎や松本による郷土文化保全の活動、そして片口との出会いが象徴する、一九三〇年代半ばの民俗学の広まりや郷土文化研究の機運が『高志人』創刊を導いたと言えよう。

さらに、創刊号には祝辞が寄せられており、『高志人』創刊に賛同した文化人のほかに郷土研究団体からの言葉や、郷土研究の現況などの説明が掲載されている。そこには、富山郷土研究会、高岡文化会、氷見郷土顕揚会、東岩瀬史談会、明治会（婦負郡杉原）が名を連ねている。その他、伏木方面、新湊、中新川郡、下新川郡の文化研究状況についての記載もある[二〇]。したがって、翁の『高志人』創刊により、それまで県内で個々に研究活動、郷土文化保全活動、創作活動を行っていた小団体や個人が、『高志人』を主軸として、結集することにもなったのではないだろうか。その点もまず『高志人』が果たした大

きな役割だと考えられよう。

三、『高志人』で目指した郷土研究とは

三―一、理論的根拠―「高志人発行について」より

『高志人』が郷土研究を目指すものであることは、明白ではあるが、さらに踏み込んで考察してみたい。郷土研究を行うことで、翁は何を成し遂げようと意図していたのだろうか。また、どのような背景から、その考えに至るようになったのだろうか。それらについて『高志人』創刊号の翁の言葉から探ってみたい。

創刊号には、一九三六年七月下旬に知人たちに送った「趣意書」が「高志人発行について」という題で掲載されており、そこには『高志人』創刊に至る経緯や目的などが具体的に記されている。「御あいさつ」「動機」「海外放浪の体験」「郷土愛と国体明徴」「日本精神の完成へ」「お願ひ」と五節に分けて説明している[二]。

まず翁は「動機」の節で、自身の境遇に触れて郷土誌発行の動機を述べる。彼が郷里や日本を離れたことで感じてきた空虚さ、そして世界主義の理想をもってアメリカへ渡ったが、実際に世界大戦後の世界情勢を眺めてみると、各自の国家への偏狭なナショナリズムは高まるばかりであり、世界平和の理念に対して幻滅を感じたことを記している。そして次のように述べている。

> そこで私は今まで、譬へて言つたら望遠鏡をもつて、遠い世界ばかりをながめ、その世界へ一歩一歩近(ママ)かうとしてゐたのが、その憧がれの美はしい世界の破滅に依つて、望遠鏡を捨て、今度は顕微鏡を覗かうと言ふ気持ちに変つて来たのでありました。つまり世界人よりも日本人、そして日本人たるには第一に越中人と言ふことでした。第一に村の人となり、そして県の人となり、国の人となつてこそ人は初めて世界の人となれるのだと言ふことを初めて覚つたわけであります（四〇頁）。

ここに翁の「世界人」の理念が表れている。翁は「米国よりの感想（全一二回）」（『富山日報』一九二四年一月一日～一四日）において、初めて「世界人」の理念につい

て記したが、その理念とは、各自が持つ出自や民族的特徴を堅持することによって、多様な文化、民族がひしめき合う世界の中で、排他的な観念を持たずに、活躍することができる人物を目指すものであった。世界人となるためには、自分の生まれ育った故郷という母体をより深く知る必要があると考え、それを実践するために、郷土誌の発行に行きついたのであった。

その「世界人」の理想に加えて、翁は日本の文化的特徴はいったい何かという点にも思い至っている。本稿の第一節で翁の経歴を振り返ったが、「海外放浪の体験」の節にその経験が記され、またその意義を翁は総括している。まず在米経験を経て日本に戻ってきたとき、日本の国民生活全体の欧米化を目の当たりにしたこと、さらに中国から南洋を通ってインドに渡った経験から世界人類の半数以上も占めるアジア大陸が、欧米人に征服されているという現状を痛感したことに触れている。当時の翁は、欧米人に支配され亡国民と化しているアジア大陸の各国民と日本を比べれば、日本はいまだその支配と征服からは幸運にも免れているという見解を持っていたようだ。「私は到るところで、まるで餓鬼のやうにやせこけた眼ばかり光つてる人達から、激しい語調で東洋人の為めの東洋論をきかされ、また東洋の救世主としての輝ける日本讃美の声をきかされました。」（四二―四三頁）と述べているように、西欧諸国に凌駕された東洋を救うために、日本人が担うべき役割を考えるようになったと記している。

続けて、「郷土愛と国体明徴」の節では、その日本人の果たすべき役割について思想的な側面から説明する。欧米化によって、日本伝統の精神は消滅したかのように翁の目には映った。しかし、東洋の文化的伝統を持ちながら、その一方、西洋化の推進にかなり成功している日本民族には、特殊な使命があるのではないかと考える。今の時代は、「東西両洋の思想が混乱迷合」しており、しかしこれは、「新らしい時代を産み出さう為めの陣痛期だ」（四三頁）と言う。そうした時代の流れにおいて、日本の伝統的な生活や思想の中にも消滅していくものがあることはやむを得ないが、日本民族の使命としては、「一方には徹底的に欧米諸民族の研究を遂げ、そしてうちには熱烈な郷土研究を果たさねばならぬこと」「この二つの研究が調和されたところに、東西両洋の思想統一があり、

新らしい日本精神の発現がある」（四四頁）と主張している。

この翁の主張には、一九三〇年代に見られた、東洋対西洋という二項対立的に文化や世界構造を把握する傾向が表れていよう。在米日本人社会においても、二世世代に東西文化の融和として、日米文化の懸け橋的役割を期待する声が高まっていた[二二]。在米経験の長かった翁も、日本人に、東西文化の橋渡し的役割を見出そうとしている点が非常に興味深い。相反しながら混迷する西洋と東洋の思想が、うまく統一されたものとして、日本の新たな思想を生み出すためには、まず、日本民族の研究や各地の郷土研究から始めることが必須だと翁は確信した。

翁の論理には、西洋と東洋の思想の統一という融和的な側面が見られるが、その一方で、西欧文化、思想に対峙できるような日本思想の確立を目指すという、一見すると相矛盾するような主張も存在している。それは「日本精神の完成へ」の節に記されており、ここでは、翁の感じる、日本精神の欧米化への危機感とともに、西欧思想に対等に渡り合えるような日本精神を生み出すことの必要性が述べられている。そして、その方向性を定めるのが郷土研究であると言う。

> 郷土を愛する心はやがて郷土の精神を作り出すものであり、それら郷土の精神を総合したものゝ所謂日本精神となつてゆくわけですが、私達の目ざす日本精神は更らに全世界、全人類に発揚してゆく可き精神であります（四六頁）。

ここでは郷土の精神を総合化したものが日本精神となり、全世界に向けて主張していくべきものとなるという壮大な希望を掲げている。しかし、現状ではまだ具体的にそれがどのような精神なのかはわからないようである。今後、その精神を見出し、作り上げることを目指し、翁は「その偉大なる精神完成への一細胞に過ぎないこの郷土研究の為めに」（四七頁）努力を重ねていきたいとその使命を述べる。

三―二、郷土研究の内容

以上のように、「高志人発行について」の記述から、『高

志人』において、翁は郷土研究を総合した日本精神の醸成を目標にしていたことが明白となった。次に、その郷土研究の内容について、引き続き『高志人』創刊号を手がかりに詳しく見てみよう。『高志人』を発表の場としてなされるべき研究とは、「（1）史前・史後の研究（2）考古学的研究（3）民俗土俗学的研究（4）伝説及び伝承の研究（5）人物研究（6）遺跡、古墳、神社、寺院、方言、家伝、諸記録等の研究」（四八頁）と記されている。これらを見てみると、歴史、考古学、民俗学、伝説や人物、伝統的な文化的建造物、方言の発掘と再評価、その保存など、かなり幅広い文化的内容を視野に入れていることがわかる。

また掲載された論稿もかなり学術的であり、『高志人』の研究雑誌という性格が色濃く表れている。例えば創刊号には、富山の古代史に焦点を当てた早川荘作「越中の史前時代考察」、また民謡がどのように歌い継がれたかの変遷を考察した藤田健次「俗謡変遷の推定説（一）」などがある。さらには郷倉千靭（せんじん）の「小杉焼について」や小柴直矩「富山浄瑠璃」など文化、文芸に着目した論稿もある。

それでは翁はどのような論稿を寄せたのであろうか。創刊号には「役行者と非常時代」を寄稿し、役行者の活躍やその時代を振り返っている[二三]。これはもともと別の雑誌に投稿する予定のものであったが、雑誌発行の都合上、急きょ創刊号に掲載することにしたという。この論稿についてはまた稿を改めたいと思うが、郷土研究として翁が寄稿したものとしては、「東谷の伝説と考察」（『高志人』第二巻一号（一九三七年一月）に着目したい。この論稿は連載を予定しており、まず第一回目では、郷里の東谷を再検討することを意図していたが、編集の都合上間に合わなかったため、翁の幼少時代の回想で始めると記してある。日本精神を探るための郷土研究の端緒として、翁はまず自らの故郷、東谷を出発点とした。

この論稿では、「不動様とガメの化身」などの言い伝えや、六郎谷よりもさらに南の、目桑、伊勢屋、小又、松倉、座主坊、長倉、城前に居住していた人々の特徴なども回想している。翁はこのように、村の口述伝承や、古くから住んでいる人々の来歴を知ることが、翁たち自身を知ることになり、それは翻って日本人を知ることでもあると考えたようである。

三―三、日本民族の精神とは何か

以上のように翁は、日本精神とは何かを、郷土研究を通して見出す目的に向かって漕ぎ出した。『高志人』の発行を通じてそれは次第に発見されていくものではあったが、翁自身はその日本精神について、何か見通しのようなものは有していたのだろうか。

『高志人』第二巻二号掲載の「二月の言葉」（一九三七年二月）を見てみよう[二四]。翁は郷土研究の意味を、大河の流れを比喩に次のように記述している。

> 人生は河である。流れ〳〵て遂には大海に落ちるのだ。その大海が千変千化して無数の河を作る。私達は、人類生活の河の流れを溯つて行つても、下つても遂には海に帰へるのである。
>
> 郷土研究は、現在私達が立つてる人生の上流か中流かの瀬や淵から源流をふりかへり、更らに溯つてゆかうとする姿である。それは中流以下の流れを清めん為め、即ち明日からの人生を明朗ならしめん為め、昨日までの、更らに昨年までの、更に〳〵その前を究めやうとする努力である（二頁）。

ここで翁は、人生を河に例え、下流の流れを清めるために、それは言ってみれば、未来をよりよく生きるために、自分たちの来し方、源流を辿ってみる、それこそが郷土研究であると述べている。続けて次のように説明する。

> ともかくも、私達は人生の川を遡つてゆくと、最後の一滴の露につきあたるのだ。その一滴づゝの露の集りが大河を形成しているのだ。神通川も揚子江も、恒河も、ダニユヴも、ミシシツピーもそれら露滴の集りである。私達が高志の国を知ることが日本を知ることであり、亜細亜を知ることであり、欧州を知ることであり、そして全世界を知ることだ。それは一滴の露はどこも一つだからである（三頁）。

ここでは、各個人の人生としての河を意味するだけでなく、各民族の文化の変遷というものを大河として捉えている。そしてそれらの大河が、最後に行き着くところは

一滴の露であると言うが、これはおそらく様々な文化の一つの源のことを指しているのであろう。その一つ一つの露から各地域、各国家の文化が出来上がり、それらの露の集まり全体が、世界を形作っているという。翁独特の世界観、文化観がここでも示されている。富山県民が高志の国の源流を知るということは、露の集合体である日本文化を知ることになり、ひいては各国家の露である文化と、その露からなる大河の集合体である世界の文化を知ることにつながるという論理である。この大河の比喩と世界観は、各自の出自の文化的特徴を尊重しながら、世界で活躍する人物を目指すという「世界人」の思想と相通じる側面がある。

さらに続けて翁は、日本の源流がいったい何であるかを述べていく。

> 日本民族の源流の一滴露であつたところの神々。それらの神々は木の葉から落ちて流の中に合同してゆくうちに、もとの露が水となつて来た。そこに神々の進化があつた。変化もあつた。そのうちに他の支流が流れ込んで来た、更に他からの支流が滔々とやつて来た。国つ神の露滴、天つ神の露滴、それらの合流が形造つた原始神道の中に、流れ込んで来た。伝教、道教、仏教、景教、其他あらゆる類を異にした支流であつた。日本の川はそのやうにして三千年間流れて来たのだ。その間に神々の姿が変つたと同じく民族の生活も精神も変つた。その混淆した流れの中に、私達は清純なる流れの源流を辿らうとする（三頁）。

ここで翁は、日本民族の源流として、原始神道への高い関心を示している。日本の古来からの宗教である神道に日本精神の源泉があると見通しをつけることは、ある意味自然な流れではあろう。著名な先人の研究者たちでも、例えば国学者の本居宣長も神道研究に力を注ぎ、また文学者のラフカディオ・ハーンも日本の精神構造の中に、神道にもとづく祖先崇拝を見出している。翁も同様に神道に着目しながらも、その研究フィールドを彼の故郷である東谷から出発しようとしている。こうして、翁はその後、「東谷の伝説とその考察」として、東谷の氏神様とその正体・氏神と部落の源流について、連載形式で論稿

を発表していくのである。

四、おわりに

以上見てきたように、翁の『高志人』創刊の背後には、彼の国境を越えた移動経験が生み出した「世界人」の思想や、また一九三〇年代の民俗学や郷土研究の隆盛という背景があった。また翁は、郷土研究を通して発見していくべき日本精神の源泉を、神道研究に求めていったのだが、さらにその神道研究を故郷東谷村を出発点として、考察を始めた。翁が「東谷の伝説とその考察」を中心に、その後どのようにして彼の神道理解を深めていくのか、またそれは翁の既刊の様々な著作、特に仏教関連の著作などを踏まえると、どのような思想的発展がみられるのか、それらの点を今後考察していきたい。そして、翁の目指した郷土研究の具体像、究明したいと目標に掲げていた日本精神が、どのようなものなのかを鮮明にしていきたい。その一方、この『高志人』をめぐる郷土を中心とした文化人たちのネットワークについても、十分に目配りしていく必要があろう。富山の郷土研究、文化研究の情報の宝庫である『高志人』研究に、本稿が一石を投じられれば幸いである。

注

一　細川光洋「吉井勇の戦中疎開日記（上）―「北陸日記」抄」『国際関係・比較文化研究』第一六巻第二号、二〇一八年三月、細川光洋「吉井勇と高志びとたち―戦中日記より　第二回　翁久允」『北日本新聞』二〇一八年八月二三日。

二　長尾洋子『越中おわら風の盆の空間誌―〈歌の町〉からみた近代』（ミネルヴァ書房、二〇一九）。

三　翁の経歴については、逸見久美・須田満編『翁久允年譜―一八八八―一九七三』（第三版）（翁久允財団、二〇二〇）、翁久允他編『翁久允全集（全十巻）』（翁久允全集刊行会、一九七二―一九七三）を参照した。

四　日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大辞典』（小学館、一九七七）、一六〇頁、『二〇世紀日本人名辞典』（中外アソシエーツ、二〇〇四）。

五　江馬修『一作家の歩み』（理論社、一九五七）、二一一―二一五頁、天児直美『炎の燃えつきる時―江馬修の生涯』（春秋社、一九八五）、二九一頁。なお『会報』一号の発行月が、表紙には「昭和八年五月二十五日」とあったが、ここでは奥付に記載の「昭和八年四月

二十五日」の方で記した。

六　『ひだびと』三年一号、飛騨考古土俗学会、一九三五年一月。

七　日本近代文学館・小田切、『日本近代文学大辞典』、二三二―二三三頁、江馬、『一作家の歩み』、天児、『炎の燃えつきる時』、二八六―二九六頁。

八　『高志人』三巻四号、一九三八年四月、三頁。

九　『日本大百科全書（電子版）』（小学館、二〇一四）、新谷尚紀『民俗学とは何か―柳田・折口・渋沢に学び直す』（吉川弘文館、二〇一一）。

一〇　柳田の記述に関しては、日本近代文学館・小田切、『日本近代文学大辞典』、三九七―三九九頁、新谷、『民俗学とは何か』を参照した。

一一　江馬も高山で始めた郷土研究の契機について、飛騨の土地柄が民俗学的にも考古学的にも豊かな資料に恵まれていた点と、「柳田国男の三十年にわたる匿れた民俗の研究が、折から広く世間に認められてきて、新しい郷土研究の機運が全国的にみなぎってきたこと」を挙げている。江馬、『一作家の歩み』、二一七―二一八頁。

一二　『高志人』三巻四号、三―四頁。須田満氏によれば、翁と川崎の書簡は、一九二九年から一九六五年までに亘り、現在八十七通確認されている。『高志人』創刊前後の手紙のやり取りからも、川崎のおわら保存会での活動が翁の郷土研究熱に影響を与えたことがうかがえる。須田氏より翁と川崎の往復書簡の翻刻原稿を教示頂き、閲覧させて頂いた。ここに感謝申し上げます。

一三　続八尾町史編纂委員会『続八尾町史』（八尾町役場、一九七三）、九二〇―九二三頁。

一四　長尾、『越中おわら風の盆の空間誌』、二二六―二五三頁。

一五　松本の経歴については続八尾町史編纂委員会、『続八尾町史』、八七五―八八〇頁を参照。また『続八尾町史』には、「同書（『八尾史談』のこと―筆者）は地方における郷土理解の唯一の宝典として珍重され、多くの町民に親しまれた。当時、郡および県下でもこの種の刊行はきわめて僅少であり、貴重な文献のひとつとなった。また、これがきっかけとなって町村における郷土史の編さんが相ついで行なわれるようになった。」（八七八頁）とまとめられていることからも、『八尾史談』の重要さが推測される。

一六　『高志人』三巻四号、四頁。

一七　翁久允他編『翁久允全集（四）』（翁久允全集刊行会、一九七二年）、二三六―二三七頁。

一八　逸見・須田、『翁久允年譜』、二〇頁。

一九　『富山大百科事典』（北日本新聞社、一九九四）、三七五頁、『二〇世紀日本人名辞典』（中外アソシエーツ、二〇〇四）、楠瀬勝監修『小杉町史―通史編』（小杉町役場、一九九七）、九五五―九五八頁、稗田菫平『小杉と文芸―片口江東、安之助その詩歌と生涯』（富山近代文芸研究会、一九八二）。

二〇　『高志人』創刊号、一九三六年九月、四九―七八頁。

二一　『高志人』創刊号、三七―四八頁。以下、引用は本文中に頁数のみ記す。また旧漢字は適宜新漢字に改めた。

二三　吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』（日本図書センター、二〇〇五）。

二三　翁久允「役行者と非常時代」『高志人』創刊号、八〇―一〇九頁。

二四　翁久允「二月の言葉」『高志人』第二巻二号、一九三七年二月、二―三頁。以下、引用は本文中に頁数のみ記す。また旧漢字は適宜新漢字に改めた。

新民謡の流行
―『民謡詩人』を中心に

近藤　周吾

私の勤務する富山高専の研究室では、北陸の詩や新民謡に関する資料を収集しており、コレクションの一環としている。その中に『民謡と詩』というものがある。これはどのような資料であり、どのように位置づけることができるのかということについて、その一端を富山の文学との関連を中心にしながら、以下、簡潔に触れていこうと思う。

一

函に入れられた『民謡と詩』は、一九二八年（昭和三年）一一月に製本された、雑誌『民謡詩人』（民謡詩人社［東京市外西巣鴨町巣鴨二二八］）の七冊合本である。七冊というのは、目次に従えば『民謡詩人』第二巻第三號・第二巻第四號・第二巻第五號・第二巻第六號・第二巻第七號・第三巻第八號・第三巻第九號の七冊であり、奥付に従えば、No.7、（奥付欠）、9、10、11、12、13である。発行年月はそれぞれ昭和三年三月一日、（奥付欠）、五月一日、六月十日、七月一日、八月一日、九月一日となる。大捌賣店は「東京堂　東海堂　北陸館　大東館」となっている。

私はこれまで富山の詩に関する研究を、次のような、いささか遠大な方針と構想に基づいて進めてきた。①実証的なアプローチにより、日本近代詩史を再審する。②『日本海詩人』や『詩と民謡』といった詩誌に着目し、北陸詩壇の全貌を明らかにする。③大村正次や中山輝、川口清の動向を追うことにより、井上靖や源氏鶏太の研究を深める。

要するに、今、このような文脈の中に『民謡詩人』を持ち込もうとしているわけだが、その理由は二つある。第一に、当時の新民謡の状況が、中央詩壇においてどのようなものであったのかが理解できるからである。実際、野口雨情、三木露風、佐藤惣之助、福田正夫、白鳥省吾、川路柳虹、草野心平らの名前が見える。第二に、そこに

北陸の文学者の活躍も認められるからである。具体的には『日本海詩人』および『詩と民謡』の主筆級の活躍が認められるからであり、翁久允の小特集のようなものが組まれている点も見逃せないと考えるからである。

第二の点の前者に関していえば、高山を代表する詩人・福田夕咲や富山で活躍した民謡詩人・山岸曙光子のものもあり興味は尽きないが、井上靖の師である大村正次と、源氏鷄太の師である中山輝に絞って調べてみても、次のような詩篇等が発表されていたことがわかる。

第二巻第三號（昭和三・三）
大村正次
［民謡］「ことツしや雪年」
［詩篇］「田螺」
中山輝
［民謡］「こないな」
［詩篇］「模索」
第二巻第四號（昭和三・四）
大村正次
［民謡］「ほのほとならう」
中山輝
［詩篇］「山巓にゐると」
第二巻第五號（昭和三・五）
大村正次
［民謡］「粉雪」
中山輝
［民謡］「眞珠」
［詩篇］「眞實の道」
第二巻第六號（昭和三・六）
大村正次
［散文詩］「神様に見放されるもの」
中山輝
［詩篇］「轉落する石」
第二巻第七號（昭和三・七）
中山輝
［詩篇］「火華」
［――］「雪と北陸歌謡」
第三巻第八號（昭和三・八）
中山輝
［詩篇］「石像」

［――］「雪と北陸歌謠」

第三巻第九號（昭和三・九）

中山輝

［詩篇］「河原の石」

二

他方、このころは翁久允が長篇小説『道なき道』（甲子社書房、一九二八年）と随筆集『コスモポリタンは語る』（聚英閣、一九二八年）を刊行していた時期に当たるわけだが、これらの刊行が話題になっているという意味でも見逃せない。

第三巻第九號（昭和三・九）

都築益世・広瀬操吉・木村重夫「翁久允氏の随筆集に就いて」

竹久夢二「翁君に送る」

「翁久允氏の随筆集に就いて」は、翁久允の『コスモポリタンは語る』が同時代にどのように受容されていたかを具体的に明らかにする資料と言える。都築益世「コスモポリタンは語る」では、「翁氏は、自省のないコスモポリタンではなくて、かへつて、熾烈な愛国精神に燃ゆるパトリオツトではなからうか。」と書いており、その後の翁久允の生き方の急所を早くも言い当てている。広瀬操吉「「宇宙人は語る」の印象」も、「このコスモポリタンには、やはり我等と同じ日本人の血が流れてゐて、どうしても祖國とは切りはなすことが出來なかつた、もろい人であつた」と捉えている。木村重夫「「宇宙人は語る」小感」もまた、「廣く世界の風潮を理解して、初めて故國に切々たる感情を持ち得た宇宙人的日本人たること」を指摘しており、「日本人」ということが意識されている傾向がうかがえる。

他方、「翁君に送る」は、翁久允と竹久夢二の交遊の実態を明らかにする上で逸することのできない資料であると言うことができる。題字は夢二の筆跡であり、「出版紀念會の日に出會した藤田君から兄の近著についての批評を書くやうにと依托を受けて、感想ぐらいなら書いて見やうと約束して、そのつもりで讀むには讀んだがどうも感想を書く氣になれないので、私信の形で手紙をかく。」

という書き出しで始まり、「糸魚川の相馬御風君のこと、富山の淀川のかこんの女のこと、その他、ぼくが浴衣がけで淀川を飛出して富山の町を走りながら、君に一方ならぬお世話をやかせたことを書きたいのだが」と思わせぶりなことも書いて、ペンを擱いている。

ここで『富山新報』（昭和四年八月一三日）の記事もあわせて参考にすると、さらに興味深いことがわかりかけてくる。

《郷土芸能小原節
保存会設立総会
十一日諸名士を迎へて
来月一日から実地宣伝

婦負郡八尾町にては県知事、内務部長その他中央芸術界の大家を顧問として組織せる小原節保存会の設立総会を、十一日午後四時より同町八尾劇場に於て開催した。

県よりは各顧問を代表して清水商工課長の出席あり。来賓として竹久夢二、翁久允、水木伸一、藤田健次、若柳吉三郎、同吉美津の名士を迎えて盛大に開会され、同会の創立の功労者、川崎順二氏を主事に推薦し、各役員の選挙、保存会の主意等を協議決定し、来賓諸氏の祝辞、講演ありて、同六時閉会。次いで、小原節の実演に移り、各名士の批判を受けて午後八時四十分、盛会裡に散会した。

しかして、来る九月一日夜より三日間、風の盆を好期として改良小原節を以て町内を練り回り、大いに郷土民謡の宣伝に努むることになった。》

引用は、おわらを語る会編『おわらの記憶』（桂書房、二〇一三年八月）による。一九二九年の夏、竹久夢二・翁久允・藤田健次が、民謡の産地として知られる八尾町を訪ねていることがわかる。

そもそも『民謡詩人』は、編集人が藤田健次、発行人は岩本貞一、装幀を竹久夢二が務めた雑誌である。そのことを知らなければどうしようもないが、それを知った上でこの記事を見なおしてみると、見え方も少し変わってくるだろう。

富山市立図書館の翁久允文庫には、戦後に復活した『詩と民謡』が所蔵されているが、そこには早川嘉一の送り

状も挟まれた状態で保管されている。早川嘉一は、戦後に中山輝から『詩と民謡』の編集を引き継いだ富山を代表する民謡詩人の一人である。

このようなことも含めて考えてくると、翁久允が富山の詩壇にもたらしたもの、媒介したものの一つに『民謡詩人』の精神があったというふうに言ってみたい誘惑に駆られる。中山輝や早川嘉一の編んだ『詩と民謡』という雑誌のタイトルにしても、案外、『民謡と詩』あたりから来ているという可能性も、否定することはできないのだから。

翁久允の『高志人』の重要性も、このような文脈の上で解明していく必要があると私などは考えている。ハンガリーでは、二〇世紀初頭にコダーイやバルトークが民謡を採集して以来、民謡研究の伝統が確立しているのに対し、日本、とりわけ戦後に編まれた日本近代の文学史や詩史、音楽史、教科書等においては、民謡というジャンルが暴力的なまでに排除され、蚊帳の外に置かれるという事態が起こり、それが常態化してきている。それはおそらく、グローバルであることとローカルであること、インターナショナルなものとナショナルなもの、コスモポリタニズムとパトリオティズムの乖離を意味しており、ある種の起源の書き換え、リヴィジョンが進行していることを露呈している。翁久允という、世界と郷土の両方に立脚できた存在を追尋していくこと自体、価値の高い仕事であると言えようが、そこでもやはり民謡とのつながりは押さえておく必要があるのではなかろうか。『民謡と詩』を手に取るだけでも、そのような感想を得ることができる。

なお「富山の淀川のかこんの女」等のエピソードについては、今後の研究課題としたい。

付記　本稿は、富山文学の会（二〇一四年六月一八日於・富山大学人文学部）における同題の発表を成稿化したものである。席上、多くのご教示を賜った。記して御礼申し上げる。

研究論文

共振する性欲
―田中兆子「べしみ」論、あるいは性欲文学史序説

谷川　拓矢

はじめに

稿者は以前拙稿で、富山文学における女性文学の展開について、とくに現代文学の観点から論じた[一]。本稿はその問題意識を継続、発展させた論である。

今回取り上げるのは、田中兆子「べしみ」である[二]。本作は第一〇回女による女のためのR-18文学賞（二〇一一）大賞受賞作である。本作がこの文学賞を受賞したことの意味と、この文学賞の存在意義については、本論にて論じる。

田中兆子は富山県出身の現代女性作家である。この点で、本作は舞台こそ富山ではないが、〈富山〉の土壌から生まれた作品と言ってよいだろう。稿者は本作を、前稿で論じたような〈豊穣〉の中から生まれた、現代女性文学の新たな展開と、まずは評したい。

本稿では、まずは語り論の立場から本作を精読し、〈何を〉〈どのように〉語った物語であるのかを見究める。さらに、日本近現代文学における性欲文学史を序説的に概観したうえで、そこへの位置づけを試みる。この点を論じるにあたっては、作者自身によるある作家からの影響についての発言を出発点とする。また、先述したように女による女のためのR-18文学賞の意義や、本作が受賞したことの意味についても併せて論じることになるだろう。

もとより八〇年代以降の現代文学における女性文学の展開が注目に値することや、富山文学には豊富な女性文学のインデックスがあることは前稿で論じた。そうした中で女性が、女性を、ありのままに、かつ肯定的に語る主体を獲得していくすがたを、とりわけ如実にあらわす〈性〉という主題を扱った作品として本作を論じることが本稿の主眼の一つであり、この点が前稿からの問題意識の継続、発展と述べる所以である。さらに、本作を日本近現代文学における性欲文学史の中に位置づける試み

は、〈性欲〉をめぐる文学の遍歴がいかに男性視線に強く縁どられたものであったかを確認することになるばかりでなく（本稿でポジ要員として扱う漱石や鷗外でさえ男性である）、そんな中で女性が自らの〈性〉をありのままに、かつ肯定的に語る主体的なすがたを清々しいまでに表現することに成功した本作は、圧倒的に新しい展開であると言えよう。こうしたところに、本作をいま論じることの意義があると稿者は考える。

田中兆子「べしみ」

この物語は、主人公である作中人物「私」の一人称視点の語りで展開される。物語の大半を占めるのは〈語りの現在〉からの回想である。まずは、回想部分のあらすじをまとめておこう。

外資系ソフトウェア会社勤務の四十歳独身[三]、二十代の時「恋愛もセックスも一度は経験した」ものの、もう「恋愛しなくても一人で生きていける、一生セックスしなくてもオッケー、と思っていた」「私」の女性器に、ある日突然、鬼神を写した能面「べしみ」に似た男の顔が生じる。そして、「べしみ」の瞳が発光し「私」を捉えた時、「私」の体は「どうにもたまらなく」なり、「取り憑かれたように」自慰行為に耽る。絶頂を迎えた「私」は、いまだかつて経験したことのない「圧倒的な快感」を知る。それ以来「私」は、その快感を求め「性欲に満ち満ち」た状態になった体を持て余し、「性欲と上手に手を取り合って、あの快感の高みに行ける」相手を探し求めてきた。しかし、「私」に突き付けられたのは嫌悪や拒絶の反応であり、「私」はショックを受け、途方に暮れてきたのだった――。

この回想の後に、物語のクライマックスで、〈語りの現在〉＝「今」における「私」によるタイムリーな語りに切り替わる。「私」は「今」、ついに出会った「女の性欲に親切な」相手であるタクシー運転手の男と「ラブホテルのベッドのなかにいる」。これがこの物語を〈語る「私」〉である。ここから本稿の読解における視点として掲げたいのは、次の三点である。①この物語を〈語る「私」〉はどのような存在か。②〈語る「私」〉の回想により〈語られる「私」〉、及び〈語りの現在〉における〈語られる「私」〉は、それぞれどのような存在として規定されているか。

③これら①②の語りの特徴から、本作に関してどのような解釈可能性を提示しうるか。以下、これらの視点を複合的に持ちながら論じていく。

作中人物「私」による一人称の語りは、〈語る「私」〉のバイアスがかかった視点で展開されることとなる。何らかの意図や欲望を持って、物語や人物を造形していく。本作の〈語る「私」〉も、ご多分に漏れず、そうした機能を持つ存在である。一方、そうであればこそ、〈語る「私」〉は同時に揺らぎを孕み、時に誤りうる存在でもあるということになる。たとえば「私」による自らの女性器についての叙述は二度あらわれるが、一度目は「薄く陰毛が生えた二つの小さな丘」と表現されるのに対し、二度目は「むらむらと陰毛に覆われた果実」と表現される。これは、二度目の叙述のほうがより現実のすがたに近く、一度目の叙述は〈語りの現在〉においても自らをよく見せようとする自意識がいまだ働いていることがあらわれた語りであるかのように読めるのだが、実際のところはどちらが正しい叙述なのか、あるいはどちらも正しくない叙述である可能性も含めて、究極的にはわからない。このように〈語る「私」〉とは、そのつど「私」独自の意志や欲望、視点、自意識や感情にもとづく偏りに左右される、揺らぎを孕む存在である。一人称視点の語りの中でも、とりわけ〈語りの現在〉からの語りは、〈語る「私」〉の視点に沿って、あるいはその視点を絶対視して読みがちであるし、また読みたくもなるのだが、統一的な地点にいる〈語りの現在〉の「私」であっても、一人称視点の語りである限り、その「私」は揺らぎを孕む存在であることに変わりはなく、それゆえに時に誤りうるし、その語りは常に真実をあらわすとは限らず、決して絶対的なものではないのである。

この物語の大半を占める回想のおおまかな内容は先述したが、実際には、この回想の中でさらに別の回想が重層的に語られる構造となっている。

メインの回想は「私」の女性器に「べしみ」が生じたことから語り始められる。これは「私」の語る契機がこの出来事にあることを示す。もしも女性器に「べしみ」が生じていなければ、「私」の語る一連の事柄はもちろん、もとより「私」が語ること自体が起こらなかった、つまり女性器への「べしみ」の発生がすべての発端として語られているのである。

一方、メインの回想のなかにさらに複数の回想が重ねられることには、どのような意味があるか。それは端的に言えば、〈語る「私」〉の、回想内の〈語られる「私」〉をある方向性に規定しようとする意図のあらわれである。

たとえば高校生の時、女性器の脇に小さなできものがあらわれた出来事の回想では「毎日気になってさわるうちにどんどん大きくなり、悪性腫瘍で女性器ごと切除なんてことになったらどうしよう、一生処女のままで終わるんだと人生真っ暗になった。ひとりでは病院にも行けず、どうしたらいいのかもわからず、一大決心して母親に見せた。」と語られる。

あるいは三十代初めに、女性器全体が腫れ上がったように真っ赤になりものすごくかゆくなった出来事の回想では「他人からうつされるような行為はひとかけらもしていないのに性病になることがあるのかと悩み、調べてみたらその可能性もあるとわかってさらに悩み、ぐずぐずと日々を過ごした。／かゆみと不安で寝不足が続き、十日ほどしてやっと近所の一番流行っていなさそうな、あちこちが傷んだ一軒家の産婦人科に行った。」と語られる。

メインの回想においても、女性器に「べしみ」が生じた時の感慨が「心の奥底では恋愛もセックスも決してあきらめてはいなかったんだと気づいて、悲しいよりも打ちのめされた。年を取り、恋愛やセックスというくだらないことから解放され、自由になったといい気になっていた。でもそれは、恋愛やセックスから見放された自分を偽るポーズにすぎなかったのだ。」と語られる。

思えばどの回想においても、〈語る「私」〉による地の文の饒舌な語りに比して、回想内の〈語られる「私」〉による肉声的発話はきわめて少ない。

以上のことから、〈語られる「私」〉を、自意識の殻への自閉傾向が強く、そのぶん肥大化した自己意識＝〈頭〉〈言葉〉により〈意味〉を求める存在として規定しようとする〈語る「私」〉の意図が露呈するのである。

そのうえで「私」が展開するのは、そうした過剰な〈頭〉〈言葉〉〈意味〉＝肥大化した自己意識が、不条理的にやってきた圧倒的な外的要素としての〈性欲〉により乗り超えられる物語である。

「私」の女性器に生じた「べしみ」の瞳が「私」を捉えた時、「私」は「見えない何かに巻き込まれるように」

「誰かに引き摺られるように」自慰行為に耽り、「生まれて初めて」の「圧倒的な快感」を得る。その場面の叙述を少し引用してみる。

…自慰が悪いことではないと理解しているのに、いつも一抹の罪悪感があった。

いま、そんなちっぽけなものは圧倒的な快感の前で吹き飛んでいた。雛鳥が初めて空を飛んだような、素直なうれしさだった。

めくるめく快感を味わった後だからなのか、先ほどまでの動揺が嘘のように、悲しくはなかった。…嫁入り前の小娘じゃあるまいし、四十年も生きてきたんだ、起こってしまったことは受け入れるしかない。

…べしみがあるにもかかわらず、体のすべてが調和している、健やかな眠りだった。

ここでの〈性欲〉は、「私」の意志とは無関係に、「私」の外部から圧倒的、不条理的に到来したもの、いわば〈他者〉的な要素であるように語られている。実際、件の自慰行為の場面でも「感じさせて欲しいという私と、この女をいかせたいという私…二つの私が一体となって取り憑かれたように、頂点に向って疾走する。」と叙述される。

それゆえ、「私」に訪れたこの〈性欲〉に〈意味〉はない。「私」の自意識＝〈頭〉〈言葉〉を超えるものであり、あらゆる〈意味〉から切り離された〈性欲〉である。たとえば恋愛、結婚、生殖といった〈意味〉からも切り離された、「それは純粋な性欲だった」。だからこそ、「私」の自慰に対する「一抹の罪悪感」は消え去る。

そして「私」はこの事態に、初めこそ動揺すれ、結局のところ「受け入れ」、肯定的に捉えようとしているように語られる。

こうして「純粋な性欲」を抱えるようになった「私」は、もう一度「あの快感の高み」に行くことを求めるが、容易には達することができない。そこで「いつものように、憂いを帯びた金髪の王子が敵国の姫である私をさらって凌辱する物語を思い浮かべ」て「自慰を試み」るのだが、「終わっても、物足りなかった」。あらゆる〈意味〉を剥落させた「純粋な性欲」の前では、もはやどのような「物語」＝〈言葉〉〈意味〉も「私」を満足させない。

加えて、「私」の目的は〈性欲〉の発散ではなく「あの快楽の高みに行」くことであるという点で、ここでも不意に訪れた「純粋な性欲」を肯定的に捉えようとする語りとなっている。

そこで「私」は気づく。「やはり誰かにもっと気持ちよくしてもらいたいのだ。」「私は、現実の、人間の男とセックスしたいのだ。」と。同時にそれは、恋愛や結婚や生殖といった〈意味〉＝〈目的〉を削ぎ落とした形で実行されてはじめて、この「純粋な性欲」を満たすことができる。こうして「私」は「性欲を受け止めてくれる」「相手」を求め始める。ここでも「私」の語りは、「性欲はそんなに蔑まれるものなのだろうか。自分の性欲を大切に扱うのはばかげたことなのだろうか。」と、「純粋な性欲」に対して肯定的なスタンスであり、かつ切実さを増してきている。

「私」の他者の希求は二度挫かれる。偶然出会った二人の男性から、立て続けに拒絶、嫌悪の反応を返されるのである。この男性からの抑圧の視線を受けた場面以降の「私」の語りは、さらに切実さを増していく。

そんな中「私」の第二の気づきが語られる。「世の中の半分は女だというのに、どこにも女がいなくてひとりぼっちのような気がした。他の女はみな女の皮をかぶったにせものだと思った。でも、私もかつてはそうだった。女をさらけだし正直に生きている女を毛嫌いし、ばかにしていたのだ」。「女の皮をかぶったにせもの」とは、さまざまな〈言葉〉で〈意味〉を付与され、その与えられた〈意味〉を、いわば〈フィクション〉を演じる女たちのことである。対して「どこにも女がいなくて」と語られるときの「女」とは、あらゆる〈意味〉〈フィクション〉を取り払った「女」のことである。この語りは、「女の皮をかぶったにせもの」であった「かつて」の自分を相対化しつつ、この時点で「女をさらけだし正直に生き」る「女」になることの意思表明となっている。それは「純粋な性欲」に「正直」になるということでもある。さらにこの語りは、先のような男性の視線のみならず、そうした男性の視線を内面化した女性自身の視線までもが、女性を抑圧しうることの告発となっている。

そうして「私」は「たまたま行き会って、お互いに受け入れあい、肉体という一点だけでつながれる相手であるタクシー運転手の男と出会い「ラブホテルのベッド

のなかにいる」。語りはここで「今」と呼称される〈語りの現在〉の時点に合流し、ここからタイムリーな語りに切り替わる。

そこで「私」に第三の気づきが訪れる。「セックスとは閉じた営みなのかもしれないが、わたしというものが溶けて、大勢の、ただの、男と女というもののなかに分け入っていくようでもあった」。「女は誰にも言えないやりかたで性欲を解消することがあるのだ。女の皮をかぶった女はそれを知らない。知らないほうが幸せなのだ。それを知っている女は、知っていても誰にも言わない。ほんとうの女なら誰でも知っていることは、語られない」。恋愛や結婚や生殖などのあらゆる〈意味〉から切り離された、「ただの、男と女」になる営為としての性交。「純粋な性欲」に「正直」になること。たとえそれが険しい道だとしても、「知らないほうが幸せ」だとしても。しかし、こうしたことは、こと女性に関してはとりわけ抑圧されてきた。語らない、語ってはいけないこととされてきたのである。男性の視線によって、あるいは女性自身の視線によって。

「私」の閉じた瞼の裏で、男に抱かれる「私」を寿ぐかのように、春の野原で「べしみ」が舞い、大笑いする。男が帰り支度を始めると、「べしみ」が去っていく。「私」は思う。「この野原がまた荒野になったとしても、もううろたえはしないだろう。」と。あらゆる〈意味〉づけ、抑圧を剥ぎとり、「ほんとうの女」として「正直」に生きるという意思表明の語りで幕を閉じる。

以上のように本作は、肥大化した自己意識＝〈頭〉〈言葉〉〈意味〉が、圧倒的な外的要素としての〈性欲〉によって乗り超えられていく物語と、ひとまずはまとめることができよう。

それを踏まえて、本作読解の着地点として、最後に次の疑問点について考察したい。いわば〈頭〉〈言葉〉〈意味〉の不可能性を知ったはずの「私」が、それでもなおこの物語を語ったのはなぜか。

男性の視線、女性自身の視線による抑圧を超えて、女性が「ほんとうの女」でいること、それを主体的に語ること。あらゆる〈言葉〉〈意味〉を取り払った「純粋な性欲」「ただの、男と女」をありのままに、かつ肯定的に語ること。たとえ誤りうるとしても。つまり、この物語は、肥大化した自己意識が「純粋な性欲」により相対化され

るさまを、〈言葉〉＝語りは誤りうるということも了解しながら、それでもなおそのありのままで肯定的な語りに抑圧を超える可能性をかけて、語ることへと身を投じていく「私」の物語であることを、その語りで示しているのである。

性欲文学史序説、及び本作の位置づけ

田中兆子は女による女のためのR-18文学賞の受賞者インタビューの中で、自らに影響を及ぼした作家の名を複数挙げている。谷川俊太郎、茨木のり子、古井由吉、金井美恵子、笙野頼子、富岡多恵子。中でも、富岡多恵子「遠い空」（昭和五七）との呼応関係は、自ら言及するところである。「べしみ」を書き終わってからその影響に気づき、授賞式にはその本を「お守り代わり」として持参したという。「「べしみ」は富岡さんの次世代の女が書いた、「遠い空」に対するつたない返歌でもある」と。

ここから本稿では、日本近現代文学における〈性欲〉を描く文学の系譜を序説的にたどり、その中に田中兆子「べしみ」を位置づけたい。

近代とは、まずもって富国強兵の時代である。兵を強め、国を富ませることで、国家の繁栄を図る。求められるのは強く若い男子の力である。そのために、父権的家族制度を維持、強化する必要があった。

そこに結びついたのが、このとき輸入された西洋思想だった。とりわけここに作用したのは、キリスト教の一神教的観念や罪の観念に由来する、プラトニックラブ・イデオロギーであり、オンリーユーフォーエバー・イデオロギーだった。プラトニックラブ＝〈性〉〈肉〉とは切り離された精神的恋愛、結婚、生殖、父権的家族制の維持・強化、近代国家としての繁栄、これらの要素が合理的に結びついたのである。こうして、プラトニックラブと結びつけられた結婚を遂げた夫婦と、彼らの生殖により生まれた子供からなる家族が近代家族の範型となったのである。さらにこうした中で、恋愛（ここではプラトニックラブの意）至上イデオロギー、異性愛イデオロギー、良妻賢母イデオロギーなどが醸成されていくことにもなったのである。約めて言えば、恋愛は〈性〉〈肉〉から切り離されたプラトニックで精神的なもの、〈性〉は近代家族における生殖のためのものとされた。

こうして、結婚制度外の〈性〉がタブー視、排除されるべきものとされるようになった。〈性〉は近代家族におけるプライベートなもの、秘匿されるべきものとされたのである。ここにさらに当時流行の学問であったセクソロジー＝性科学（クラフト・エビング）の視線が加わった。こうして〈性〉は管理・抑制の対象となった。〈性〉の抑圧の始まりである。

以来、近代以降において、〈性〉は苦悩・煩悶させるもの、病・倒錯・異常を示すもの、スキャンダラスなもの、日常からの避難地＝ユートピア的非日常のものなど、何らかの否定的なイメージを帯同して扱われるようになった。

当時は、石原千秋などの指摘を待つまでもなく、両性問題など女性の心や体をめぐる議論が真剣に交わされていたような時代である[四]。ただでさえ〈性〉が抑圧の対象とされていく中で、女性の〈性〉は余計に抑圧されていった[五]。女性の〈性〉に対する抑圧は根深く、そこには男性の視線のみならず、男性の視線を内面化した女性自身の視線も作用するのである。

ここまで近代以降における〈性〉にまつわる状況を概観した。ここからは、こうした〈性〉のすがたを文学作品の中に探っていく。近代から現代にかけての作家、作品に即して見ていくことで、〈性〉の扱われ方の変化を浮き彫りにしたい。

坪内逍遥『当世書生気質』（明治一八―一九）の時点で、すでに「色事」は「上の恋」「中の恋」「下の恋」の三種類に分類されている。「意気相投じて相愛する」「恋の座頭ともいふべき」「上の恋」から、「肉体の快楽をば、ただ専一に主眼として、男女相慕ふ情をいふ、すなはち鳥獣の慾」とされる「下の恋」までという形で、いわばプラトニックラブが「上」、「肉体の快楽」は「下」と位置づけられている[六]。

日清戦争（明治二七―二八）、日露戦争（明治三七―三八）を経て、近代化が完成に向って歩を進めていくとともに、プラトニックラブを土台とする近代的恋愛制度は定着していき、同時に〈性〉に対する抑圧的扱いもまた確かなものとなっていくのである。

田山花袋「蒲団」（明治四〇）は妻子ある者の〈性欲〉による苦悩、煩悶を描く。また女性の〈性〉への監視、管理の物語でもある。〈性欲〉による苦悩、煩悶を多く描

くことになる自然主義から私小説につながる系譜の嚆矢である。近代的恋愛制度が土台となり、管理・抑圧の対象となった〈性〉の、赤裸々な〈告白〉という文化がここで生まれたのである。

武者小路実篤「お目出たき人」（明治四四）では、「自分は誰かと結婚しない間は淫慾に誘惑される時手淫に逃れて行かうと思つてゐる。…自分はこの後ろぐらい所をなくす爲にも實は早く鶴と結婚したく思つてゐるのだ。」という形で、「後ろぐらい」行為としての「手淫」が語られる[七]。結婚制度外の〈性〉として自慰行為が取り上げられ、有害なものと扱われている。

その点、これらと同時代の漱石や鷗外は健闘していると言えるだろう。

たとえば漱石。文学のみならず生物学、心理学、社会学など、学習により多様な教養を習得していたからだろうか。

たとえば明治三六―三八年までの東京帝国大学における講義録である『文学論』（明治四〇）では、「両性的本能は如何にも下品の様なれど、これもと人間固有の本能の一なれば、事実にして、嫌なりといふも片附け方なし。而して所謂恋なるものはこの両性的本能を中心として複雑なる分子を総合して発達したる結果なれば到底その性質よりこの基本的本能を除去すること能はざるなり。」「ただ恋は神聖なりなど、説く論者には頗る妥当を欠くの感あるべし。…もしJamesが説く如く情緒は肉体的状態の変化に伴ふものにして、肉体的状態変化の因にあらずと仮定すれば、悲しきが故に泣くにあらず、泣くが故に悲しとの結論に達す。」「所謂恋情なるものより両性的本能即ち肉感を引き去るの難きは明かなりとす。」「恋は両性的本能にその源を有すること明かなれば、余はここにこの情緒を収めたるものなり。」と論じている[八]。ここでの「両性的本能」とは端的に〈性欲〉のことである。つまり、漱石は「恋」の根源にあるのは「情緒」よりもむしろ〈性欲〉である、愛しいから〈性欲〉を抱くのではなく、〈性欲〉を抱くから愛しくなるのだと述べている。

『三四郎』（明治四一）では、名古屋での誘う女性と、それに応答できない三四郎が描かれる。そんな三四郎に対して「あなたはよっぽど度胸のない方ですね。」と、女性に言わせている[九]。ここでは女性も〈性欲〉を、そして主体性を持つ存在として描かれている。

『こころ』（大正三）では、青年「私」に対して「先生」に「恋に上る段階なんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです。」と言わせる[一〇]。ここでは異性愛に至る通過儀礼として同性愛（的傾向）に向かうことが、一般的に起こることとして扱われている。ここでは同性愛（的傾向）は倒錯、異常、逸脱、病などとは見なされず、一般的に多くの者が通る段階として扱われている。

やはり文学のみならず医学的知識を積んでいた鷗外についても同様のことが言える。

『キタ・セクスアリス』（明治四二）では「硬派たるが書生の本色で、軟派たるは多少影護い処があるように見えていた。紺足袋小倉袴は硬派の服装であるのに、軟派もその真似をしている。只軟派は同じ服装をしていても、袖をまくることが少い。肩を怒らすることが少い。ステッキを持ってもステッキが細い。休日に外出する時なんぞは、そっと絹物を着て白足袋を穿いたり何かする。」と語られる[一一]。ここでの「硬派」「軟派」は、それぞれ男色と女色のことである。明治初期の学生社会においては男色文化が広まっており、女色は「影護い」ものとして非難される傾向にあった[一二]。この語りは、「硬派」＝男性同性愛が誇りを持って歩き、異端視されるどころか「軟派」＝女色の上位概念として機能していた、一時代の一社会の様子を活写している。

『雁』（明治四四）では、榊敦子の指摘したように[一三]、ヒロインお玉の自慰が描かれる。「朝目を醒まして起きずにはいられなかったお玉も、この頃は梅が、「けさは流しに氷が張っています、も少しお休になっていらっしゃいまし」なぞと云うと、つい布団にくるまっている様になった。教育家は妄想を起させぬために青年に床に入ってから寐附かずにいるな、目が醒めてから起きずにいるなと戒める。少壮な身を暖い衾の裡に置けば、毒草の花を火の中に咲かせたような写象が萌すからである。お玉の想像もこんな時には随分放恣になって来ることがある。そう云う時には目に一種の光が生じて、酒に酔ったように瞼から頬に掛けて紅が漲るのである。」という箇所の語りである[一四]。これはむろん女性の〈性欲〉であり、それをさらりと、美しいオブラートを纏わせて描いている。

このように漱石や鷗外は、〈性〉が管理・抑圧の対象とされていく中で、〈性欲〉そのもの、女性の〈性〉、同性

愛など、〈性〉の諸相を方法的に捉える視点を持っていたことがわかる。

さらに時代を下って、谷崎潤一郎。「刺青」（明治四三）に始まり、『痴人の愛』（大正一三）を経て、昭和三―五年に断続連載された『卍』（昭和六）や『春琴抄』（昭和八）に至る谷崎の作品群は、変態、異常、倒錯と見なされる〈性〉を描く。たしかにモチーフとしては女性主体の〈性〉や同性愛が扱われ、谷崎本人のスタンスは女性礼賛であるかもしれないが、そうした題材をスキャンダラスに語る視線がある限り、やはりそこに描かれる〈性〉は抑圧の対象となる。

永井荷風は『あめりか物語』（明治四一）『ふらんす物語』（明治四二）から一つの到達点『濹東奇譚』（昭和一二）に至る系譜で、日常社会から逸脱したユートピア的非日常空間としての〈性〉の世界をモチーフとし、そうしたかの地でのエロス的慰安の物語を描いた。

これは「驟雨」（昭和二九）に始まり、「漂う部屋」（昭和三〇）「原色の街」（昭和三一）などを経て、到達点「娼婦の部屋」（昭和三四）に至る、吉行淳之介の〈娼婦もの〉に接続する、一つの系譜と見なすことができる。

三島由紀夫『仮面の告白』（昭和二四）において、同性愛もいよいよ〈告白〉すべきもの＝抑圧されるべきものとなった。これまで通過儀礼や誇り高き「硬派」などといった個人の選択としての同性愛だったものが、ここに至って〈同性愛者〉という先天的な刻印がアイデンティティとして与えられているかのように語られる。しかも、一人の人間の人格や人生を負の方向に決定づけるものとして。結婚制度外の〈性〉の一つにあたる同性愛もまた、こうして抑圧の対象となっていったのである。

ここまで、明治から戦後までの性欲文学の系譜を、特筆すべきものに限定して急ぎ足で概観してきた。それでは、それ以降の現代文学における〈性欲〉の扱われ方はどうか。

特筆すべきは、前稿でも論じた八〇年代以降のラディカルかつ新たな女性文学の台頭だろう。女性が語る主体となること。女性が女性の〈性〉について語ること。消費の対象としての性ではなく、ラディカルな〈性〉そのものを方法的に語ること。こうしたことが可能となるためには、ここまで時間を待たねばならなかった。こうした意味で、本稿では八〇年代以降を、女性の〈性〉の抑

圧からの脱却の出発点と位置づけたい。

田中兆子自身が名前を挙げた富岡多恵子も、この出発点に位置する女性作家の一人である。本稿の問題意識にもとづくと、富岡において注目すべきは『芻狗』（昭和五五）「遠い空」（昭和五七）『波打つ土地』（昭和五八）の展開である。いずれも女性による、〈性〉をラディカルに追求する作品群である。加藤典洋は、これらの富岡多恵子の作品たちが「『女』ではなくなった女」と「『男』ではない男」の間になりたつかも知れないヒトとヒトの関係」を描き、「男女が「情緒的に」あるいは「恋愛」の相をつうじて現れるほかない、「文学」という妓楼の世界の外側に立つこと」をめざした「〝外出〟の産物」であると指摘した[一五]。

山田詠美『ベッドタイムアイズ』（昭和六〇）は、〈性〉＝肉体の要求に真摯に耳を傾け追求することで、はじめてほの見えてくる精神を、女性ならではの視点、感性にもとづき表現した。とくに主人公「私」（＝「キム」）が女性器を「生き物なのよ。呼吸してるの。鏡を当てると曇るのよ。」と語ることには注目しておきたい[一六]。この語りは、キムがめくるめく逢瀬の相手スプーンに「伝えようとしたが声にはならな」かったものである。ここで私たちが耳にしているのは、抑圧されてきた女性（の身体）も、たしかに「生き」て「呼吸して」いることを伝える、〈言葉〉として発される以前の生身の声である。

そしてこの展開で特筆すべきは、やはり女による女のためのR-18文学賞の創始（平成一四）であろう。八〇年代以降の女性文学における、抑圧されてきた女性の〈性〉や主体性の復権という目標を、この文学賞の創設は象徴していると言えよう。ちなみに、本稿で論じた田中兆子のみならず、前稿で論じた我らが現代富山文学の旗手の一人、山内マリコもこの文学賞出身である。実際、山内にはそのことを象徴するような作品や発言が複数ある[一七]。

あらためて、田中兆子「べしみ」は、抑圧されてきた女性の〈性〉をありのままに、かつ肯定的に語る主体性を獲得する物語であった。だからこそ、本作の、女による女のためのR-18文学賞受賞は必然だったのである。

おわりに

本稿では、田中兆子「べしみ」を女性が自らの〈性〉をありのままに、かつ肯定的に語る主体を獲得する物語として読んだ。また、たとえ〈言葉〉が不可能性を孕み、誤りうるものだとしても、それでもなお抑圧を超える可能性にかけて語ることへと身を投じる決意の物語であることが、その語りの構造により示されていることを論じた。さらに、本作を日本近現代文学における性欲文学史に位置づけることで、男性視線、あるいはそれを内面化した女性自身の視線に縁どられた〈性欲〉をめぐる文学史の中で、いかに本作が特筆すべき新展開を示しているかを明らかにした。ここから、本作の女性文学史における先進性、さらに言えば日本近現代文学史における意義もまた自ずと炙り出されてくるだろう。そして、こうした文学が〈富山〉という〈豊穣〉からまた一つ生まれたことも――。

引き続き〈富山〉における女性文学の展開のありようを追認すること。日本近現代文学の立ち位置から、〈性欲〉にまつわる文学のさらなる追究、〈性〉の視座から女性文学史を眺めてみること、男性・女性それぞれの同性愛を主題とする文学の系譜的研究。小説＝語り＝フィクション、ひいては文学そのものの成立条件や意味を問い直させる作品の研究。こうした論点が、今後の追究課題として挙げられるだろう。

註

一　「現代女性作家による富山文学の変遷―木崎さと子から山内マリコへ―」（『群峰4』、富山文学の会、二〇一八）。

二　本稿の読解には田中兆子『甘いお菓子は食べません』（新潮文庫、二〇一六）所収の「べしみ」本文を用いる。本作からの引用はすべてこれに拠るものとする。

三　本作における〈語りの現在〉を作品発表時と同時期と考えると、語り手「私」は、男女雇用機会均等法施行（一九八六）以降に二十代、三十代を過ごした女性であることが分かる。

四　石原千秋編『生れて来た以上は、生きねばならぬ　漱石珠玉の言葉』（新潮文庫、二〇一七）所収、石原千秋「解説―漱石文学の余白と日本の近代」などを参照。

五　伊藤氏貴「女性同性愛の文学史、あるいは「レズビアン」という不幸―ＬＧＢＴ批判序説２」（『文學界』七〇（六）、文藝春秋、二〇一六、六）は、女性同性愛をテーマにしながら、女性の

〈性〉への抑圧を［主体性の抑圧］［性の剥奪］［消費財化］の三つにまとめた。

六　ここでの引用は、岩波文庫版の坪内逍遥『当世書生気質』に拠るものとする。

七　ここでの引用は、岩波文庫版の武者小路実篤『お目出たき人・世間知らず』所収の「お目出たき人」に拠るものとする。

八　ここでの引用は、岩波文庫版の夏目漱石『文学論（上）』に拠るものとする。

九　ここでの引用は、新潮文庫版の夏目漱石『三四郎』に拠るものとする。

一〇　ここでの引用は、新潮文庫版の夏目漱石『こころ』に拠るものとする。

一一　ここでの引用は、新潮文庫版の森鷗外『キタ・セクスアリス』に拠るものとする。

一二　本橋龍晃「正される性欲―森鷗外『雁』論―」（『近代文学　第二次　研究と資料　一一』、早稲田大学大学院教育学研究科、二〇一七、三）参照。

一三　榊敦子『行為としての小説―ナラトロジーを超えて』（新曜社、一九九六、六）。

一四　ここでの引用は、新潮文庫版の森鷗外『雁』に拠るものとする。

一五　富岡多恵子『波打つ土地・芻狗』（講談社文芸文庫、一九八八）所収の加藤典洋「解説　壁のまえの苦笑―『波打つ土地』再訪」。

一六　ここでの引用は、新潮文庫版の山田詠美『ベッドタイムアイズ・指の戯れ・ジェシーの背骨』所収の「ベッドタイムアイズ」に拠るものとする。

一七　山内の小説作品には地方都市における〈性〉をめぐる状況を物語ったものも数多い。さらに、これまた女による女のためのR・18文学賞出身の現代女性作家である窪美澄と山内との対談「ダウナーなルーザーのための小説」（『ユリイカ　七月号　特集＊女子とエロ・小説篇』、青土社、二〇一三、七）では、山内は自らの自慰経験について語っている。「わたしが性描写でくらくら来たのは、『ノルウェイの森』に出てくるレイコさんのピアノの生徒だった一三歳くらいの女の子ですね。あれがほんっとーにいやらしくて。／あのシーンで何回オナニーしたことか（笑）。むらむらっと来たら、おもむろに『ノルウェイの森』下巻を取り出して、折ってあるところを読むんです。」とある。

群峰　第3号

発行日：２０１７年３月４日

◇研究論文

黒﨑　真美

横山源之助と郷土の人々

今村　郁夫

原典の書き込みから見る小泉八雲「常識」―ヘルン文庫調査から―

金山　克哉

北方の冬　高島高論

近藤　周吾

坂口安吾と富山

小谷　瑛輔

〈子どもたちの時間〉の現代―山内マリコ論序説

◇富山文学の回第７回研究大会　八木光昭先生講演抄録

◇文学散歩　報告

澤田　隆彰

高志の国文学館周辺の文学散歩

◇２０１６年度　活動記録

群峰　第4号

発行日：２０１８年３月３日

◇研究論文

木下　晶

林忠正「外山博士の演説を読む」をめぐって～日本西洋美術教育の提言～

孫　媛媛

芥川龍之介の金沢訪問と室生犀星

水野　真理子

小寺菊子の作品に垣間見る宗教観―「他力信心の女」「念仏の家」より

谷川　拓矢

現代女性作家による富山文学の変遷―木崎さと子から山内マリコへ―

◇講演筆録

上田　正行

千石喜久と言う詩人―「日本海詩人」を視野に入れつゝ

◇文学散歩　報告

黒﨑　真美

魚津文学散歩報告

◇２０１７年度　活動報告

資料・報告

「黒百合」私注

高熊　哲也

富山高等専門学校の五年生の「日本語と文化」という科目で泉鏡花の「黒百合」を扱った際に、学生諸君の読解の便宜を図るために講義資料を作成した。以下に掲げるのは、その資料に若干加筆修正を加えたものである。学生諸君の修学用ということで、古語や古い事物についての一般的な語釈を施したものが多いが、富山の地名や民謡に関する記述、さらには、鏡花が作品の構成上施した富山の地勢に関するデフォルメに関わる解説も加えている。一般の読者の便宜や鏡花研究の一助となるのではないかと考えとりまとめた次第である。

（序）

岩滝　架空の地名。立山への入り口として、上滝（旧大山町上滝＝現富山市）や大岩（上市町）を想起させる。十八段には、蛍の名所で奥に滝があると紹介される。上滝から称名滝に道が通じていて、立山に登る八郎坂という登山道がある。一方同段で紹介されている「素麺、白玉、心太」は大岩山日石寺参道の名物。

鬼と呼ぶさえ　「鬼」百合という呼び名であってさえも（なお親しみの情を呼び起こさせるのだが）。

（第一段）

袖几帳　袖で顔を覆い隠すことを言う。ここは正視できかねる意。

四十物町　富山市内中心部の地名。現在の中央通りの北側にあたる東四十物町と、現在の総曲輪の南側にあたる西四十物町があった。ここは西四十物町。

絹セル　絹にセル（毛織物）を織り込んだ生地。

単衣　裏地を付けない和服。

縮緬　絹織物の一つ。布面に細かくしぼ（皺状の凹凸）を立たせた物を言う。

蒲柳の姿に似ないで　蒲柳は体質が弱く頼りないことを言う。ここは見た目は弱々しく見えるが、それに似合わず、の意。

パナマの帽子　パナマ草の若葉を白く曝した繊維で編んだ夏帽子。

因ってもって身の金箔とする処の　自分に威を備えるためのものとする、の意。ジャムを威を借りて。

内福　うわべはさほどに見えなくとも裕福なこと。

子爵　華族の五爵の序列の第四番目。

恐れるな。小天狗め、　閉口するなあ、小天狗（こしゃくな若者＝瀧太郎）め。

お納戸　納戸は染色の色を指し、ここはねずみがかった藍色の、意。

薩摩縞　もとは沖縄に産した縞模様の木綿生地。薩摩藩が琉球を支配していて、鹿児島でも生産したことからこの名がある。

（第二段）

前栽　庭の植え込み、「せんざい」と読む。

鄙めいた　田舎風の。

日車　向日葵の異称。

（第三段）

紅革　紅色に染めた革。

鶯張　踏むと板をとめたかすがいが音を発するように作った床。廊下に用い、建物への侵入者を検知する役割も果たした。

老実立って　まじめな態度で振る舞って。

ござったのは食物でみねえ、夏向は恐れるぜ　「ござる」には腐るという意味もあることから、ござったというような丁寧な物言いは、夏だったら食べ物を腐らせる恐れがあると、ぞんざいな口の利き方を自己弁護した洒落。

（第四段）

頤　あご。

心易立て　親しさになれて遠慮をせず、気安く。

後生だ　後生は来世の意から転じて、一生のお願い。ここは頼むから、の意。

おいらのせいじゃあないぞ　殺生や悪事をするのは自分の本意ではなく、成り行きや事情、あるいは定められたことだから、仕方なくするのだと責めを逃れるためのいいわけ。この作品では他の場面でも頻出し、人物造形や場面設定に関わる表現。

眶　目のふち、周囲。

心なく見たらば　心を入れず、注意散漫で見ていたなら。

験ある　験はもともと、証拠、しるしの意。祈祷、呪術、修行によって得られる効果、効き目を言う。ここは蟻を捉えた植物の力がはっきり見えたことを指している。

（第五段）

白金巾の前懸　金巾は目の細かい薄地の綿布のことで、白い布で作ったエプロン様のものを襟に懸け、着物が汚れないようにしている。

モウセンゴケ　山野の湿地に生える食虫植物。高さ二十センチメートルぐらいになる。

蚋　ぶよともいう。はえに似た小さな羽虫で、吸血して病原体を媒介する。

（第六段）

嫣然として　あでやかににっこり笑う様。

端なくも見えて　現代語の「はしたない」はつつしみがなく不作法なという意味だが、古語では中途半端で具合悪い様を言う。ここは、指輪を出したはいいが、滝太郎が受け取らないので、具合悪くせかせるように「おしまいなさいよ」と言ったということ。

（第七段）

総曲輪　富山市内中心部の地名。

榎　富山市内を流れる神通川の岸辺に一本榎と呼ばれる大樹があったという。絵本太閤記第五編「ぶらり火の説」に見られる愛妾小百合姫惨殺伝説が伝わることが、第十段の冒頭に記される。

旅篭町　富山市内中心部の地名。総曲輪から南西のほど近く。

久留米の蚊飛白　久留米に産した木綿の丈夫な着物。細かい飛白模様が蚊が群がり飛んでいるようなさまからこの名がある。

兵児帯　兵児は薩摩で青年男子を指す語。若い男性や子どもが締める縮緬をしごいた帯をいう。明治以降薩摩の風習が東京にもたらされて一般化したという。

紬の黒の紋付き　紋の付いた羽織は正装ではあるが、紬織りのものは日常着に用いられた。またここでは皺になったとあり、ややくたびれた風情。

懐中物　懐にしまう物、財布などの貴重品。

紅絹の切　紅花で無地に染めた絹布。眼病の目を拭くと効果があるとされていた。

鯨波　「とき（鬨）の声」は合戦で士気を高めるために発するものであるが、転じて多くの者が一斉に上げる声を指す。ここは大勢の子どもたちがわっとあげた声。

中形　中くらいの大きさの染め模様。浴衣によく用いられた。

繻子　絹織物の一種。表面が滑らかでつやがある。

帯揚　女性の和装で、帯の結び目が下がらないように整えるためのもの。

唐縮緬　薄く柔らかい毛織物。メリンス。

怪我　ここは負傷のことではなく、あやまちや過失、不慮の事故を指す語。

按摩針　多く按摩や針（灸）に従事したことから、目の不自由な人を指すが、ここは多分に揶揄している調子である。

三年先の烏　「来年のことを言えば鬼が笑う」という慣用句の類例に「烏が笑う」の形がある。不確定な将来のことなど予測できないことから、糸に足を取られたのは、三年先のことを言ったら笑うような烏のせいだと、自分の責めをあてどのないものになすりつけたものか。先に掲げた「おいらのせいじゃあないぞ。」がここでも使われている。

新庄通れば…　富山市梅沢町の円隆寺（地元ではギョーギハンと呼ばれる）で子供たちを中心とした輪踊りが行われていた。盆踊りの一種だが、その踊りに際して歌われるのが「さんさい節」で、その詞章の一つと見られる。また越中おわら節には「山へ登れば／茨が止める／茨離しゃれ／オワラ／日が暮れる」という詞章がある。

（第八段）

お寝って　中世の女房言葉でお夜を動詞化させたもの。お休みになるの意。目を覚ますの意で「おひるなる」もある。

愁眉　愁いを含んだ表情。心中の悲しみや心配が表れた顔つき。

（第九段）

衣紋を緩げ　衣紋は衣服のひだ・折り目のことで、着物の場合は胸元、襟を言いう。そこをゆったりと広げて着崩した様。

弥蔵　懐手をして握りこぶしをつくり、着物を突き上げ

るようにした様。

仇口　無駄口。「おいらのせいじゃあないぞ。」と独り言を言っているので、滝太郎はよからぬことを働いたらしい。懐に入れているものに関係しそうだということがほのめかされている。

驚破というと自分の目を先に塞ぐ　「すわ」は注意を促したり行動を起こそうとする時に発する言葉。さあ、それっ。子どもはいざとなると、目先のことが見えなくなる、の意。

南無三　もとは南無三宝で、三宝は仏法僧を指し、仏に帰依することを述べて救いを求める言葉。転じて驚いたり失敗した時に使われるようになり、しまった、弱ったの意。

此奴羽搏をしない雁だ、と高をくくって　滝太郎の様子が優しそうなので、自分たちを叱り飛ばしたりはしないだろうと見くびって。

薄月　薄雲に遮られて月光が薄れた月。

蜘蛛の子　散り散りに逃げた子どもたちのこと。蜘蛛の子を散らすという慣用表現に、子どもたちが糸を操ることをかけた表現。

（第十段）

口碑　言い伝え、伝説。

稗史　正史に対して、公認されない民間の歴史。

佐々成政　戦国時代の武将、織田信長に仕えた後、越中を領有した。豊臣秀吉に恭順の意を示したが、国替えの後失政を問われ切腹させられた。「黒百合」の先駆作と見られる「蛇喰ひ」では、成政が愛妾を惨殺したため、神通河畔に火の玉が出るという「ぶらり火」伝説が作品の背景として用いられている。

かんてら　金属などで作られた携帯用の石油灯。

蓬々として　植物が生い茂る様。

済度　苦界から救って彼岸に送ること。俗に成仏させる。

銀流し　水銀に砥粉（とのこ）をまぜ、銅や真鍮などにすりつけて銀色にすることで、まがい物を扱う露店の商いであった。

真鍮　銅と亜鉛の合金。融点が低く加工がしやすく、黄金色が好まれた。

ガラハギ　がらは中身を取り去ったもの、「接（は）ぐ」はつなぎ合わせることを言う。劣悪な地金に別の金属を継ぎ合わせることを言うか。

尻ッ刎　尻上がりの声の調子。

鉄漿　「かね」と読む。民間ではつけがねと呼ばれるお歯黒のこと。もとは貴族や武家が男女とも行ったが、近世では女性だけにその風習が残った。

中年増　年増は娘盛りを過ぎた女性のことを指し、江戸時代では二十歳前後からそう呼ばれた。中年増はやや年かさがいって二十代半ば以降を言う。

姉さん被　女性が手拭いをかけて髪を覆う場合のかぶり方。

絞　絞り染めの略で、布の所々を糸で縛って染めて模様を出したもの。

蓮葉　軽薄で軽はずみなこと。特に女性の振るまいが品のない様子に用いる。

斜子打　ななこは表面に細かい粒を立てた魚卵のような模様のこと。魚子とも書いて、織物地などについて言うが、ここは彫金（打ち）でそのような模様を出したもの。

白粉首　首筋におしろいを塗った様。娼妓などを指す。

赤襟　赤い半襟を掛けた女。まだ若く一人前でない芸妓を言う。

（第十一段）

助六　歌舞伎の演目「助六由縁江戸桜（すけろくゆかりのえどざくら）」の通称、またその主人公助六。傘の陰から姿を現す場面がある。

雀入海中為蛤　中国の俗言で、雀が海辺で遊んで蛤になると考えられていたという。物事が変化しやすいたとえ。

立合　店先に立ち並ぶ人々、またそれを店の側から呼ぶ言葉で、皆さんの意。

器量が操る木偶　木偶は人形、操り人形。女性が美しいのに惹かれて集まってくる客をこう呼んだ。

黄な声　目立つような高く鋭い声。

伝法に　江戸時代、伝法院の寺男たちが寺の威光をかさに着て無銭飲食などをしたことから、乱暴・粗暴な言動を言うようになった。後、勇み肌に気取った様にも使われた。

下っ腹に毛のない　老いた狸や狼などは下腹に毛がないということから、世間ずれした老獪な人の様を指す。

（第十二段）

口切り　容器の封を切って開けることから物事のし始めを言う。特に商売で最初の取引や客を指す。

別に心あって存するごとく　別に考えている事があって引き留めようとするように。

他人ではなくなって　（血が流れたので）人ごとでないように心配して。

（第十三段）

お園小路　未詳。

桜木町　富山市中心部の繁華街。

寸法　あらかじめ立てておく予想や計画、手はず、もくろみ。またそれが実現した状況も指す。

心合　気脈の通じた、仲の良い。

コスメチック　男性用の整髪料、単にチックとも言う。

吝　金銭を惜しむところから、了見が狭い、みみっちいことに言う。ここは笹部が学歴などにこだわらない実践派であることを示している。

辺幅を修せず　辺幅は布などの縁やヘリを言う。「辺幅を修す」で上辺を飾り、見栄を張るの意。

衣兜　ポケット。

独擅　思い通りに振る舞うこと。「独擅場」はひとり舞台のことを言うが、誤って定着したもの。

（第十四段）

国色　国内随一の美人。「こくしょく」と音読みする。ちなみに牡丹の異名。

光輝天に燦爛する　天空に光り輝くの意だが、ここは派手に知れ渡ることを指している。

廉　数えたてるべき項目、理由。罪状にあたる内容などについて言う。

（第十五段）

闊歩　大またにゆったり歩く。いばった振る舞いをする。

振粛　衰えたりたるんだりした気風を引き締めること。

喝破　大声で叱る、誤りを見抜く。

南無三宝　先述のように本義は仏法僧の三宝に帰依するの意。驚いたときやものごとに失敗したときなどに仏の加護を祈って発する語。ここは島野が関係を暴かれた男女の立場に立って、助けてください、とおどけたことを表現している。

胡乱　乱れた様から転じて、怪しげな人物や言動を言う。

不埒　法に外れたけしからぬ行いをし、ふとどきなこと。

尤物　優れたもの、ここは美女のこと。

（第十六段）

端居　風通しのよい縁側など、家の端近くに座って涼むこと。

青柳という旅店　未詳。

葎　野原に茂る雑草のことだが、ここは力松が自分の住まいの粗末なことを謙遜して言っている。

達引く　義理立てする、味方して応援する。また気前よく金銭を建て替える、援助すること。

別業　別荘。

湯の谷　「湯の谷」そのものは未詳。あるいは鏡花の設定した架空の地名か。次項の飛越地震と温泉の関わりで言えば、かつて立山カルデラに存して、立山登山の基地とも言うべき位置にあった立山温泉が想起される。開湯は十六世紀に遡るとされ、飛越地震で壊滅的被害を被ったが、明治になって立山参拝の一般化に乗って再興され繁栄したが、一九六九年の豪雨で再び被害を受け、一九七三年に廃湯した。従って明治期には有名なスポットとして名が知られており、鏡花のイメージの中にはあったと思われるが、富山市内との往復の時間を考えると直接のモデルとはしがたい。

元治年間立山に山崩れがあって　飛越地震のために鳶山が崩壊し、その土砂で堰き止められてできた常願寺川のダム湖が決壊し、下流域一帯を土石流でおし流す災害が起きたのは、安政五年（一八五六年）のことであった。

（第十七段）

ささめ、為朝、博多…　以下すべてゆりの種類を言う。

もう一色　もう一種類。

太閤記　絵本太閤記のこと。武内確斎作・岡田玉山画（一七九七～一八〇二刊）佐々成政に関わる章段が、本作や前駆作品「蛇喰ひ」の内容に深く関わる。

（第十八段）

這般　これらの。

踞った　膝をついて座った、正座した。

お城の真北に当たり…　富山の実際の地勢とは合致しない。架空の文学空間が設定されている。

ついしか　いまだかつて、ついぞ。

（第十九段）

浅間　端近でむき出しな様子。

気扱い　気遣い、気兼ね。

頓狂　「とんきょ」とルビがあるが、とんきょうに同じ。調子はずれの言動をすること。

（第二十段）

園生　植物を植える園、庭。

（第二十一段）

端なく　思いがけず。

（第二十二段）

一刻に　頑固に。

蓋し　おそらく、たぶん。

お不動様　序段の「石滝」の注に、あるように大岩山日石寺を背景にした表現。日石寺は不動尊の磨崖仏を本尊とする。

（第二十三段）

自分では業平なんだから　業平は平安時代の歌人在原業平。島野が自分では色男を気取っていることを表現している。

芸妓の兄さん、後家の後見、和尚の姪にて候ものは、油断がならぬ　世間体をはばかる男女の仲を表向きにいつわる常套手段を三つあげている。

瞋恚　激しい怒り。

肉が動く　「肉」は「しし・ししむら」と読み、激しい感情に突き動かされて、体が震えるような状態。

油団　和紙を厚く貼り合わせて、桐油をひいたもの。夏用の敷物に用いた。

上框　家の上がり口の縁に渡した横木。面を隠すための化粧横木。

悪推　悪推量の略、都合の悪い方向へ気を回すこと。ここでは二人が暗がりにいたことに対して、島野があらぬ想像をして嫉妬していることをいっている。

（第二十四段）

下〆　着物の下に締める細いひも。

南無三　前出南無三宝に同じだが、ここでは不都合なことになった、しまったの意。

良くないてや　「てや」は富山県呉西地区の方言と思われる。伝聞調に「〜だということだ」の意から、自分の判断を客観的・一般的なものだと表明するニュアンスがある。（世間で言われるように）良くないことですよ。

雲横秦嶺家何在　雪擁藍関馬不前…　唐の詩人・韓愈（韓昌黎）の「左遷至藍関示姪孫湘」（左遷せられて藍関に至り姪（ちつ）孫湘に示す。）による。仏舎利を迎えて禁中でまつった天子に諫言して左遷された折に、別れを惜しみに来た次兄の孫韓湘に示した詩の一部。孫湘は仙術をよくし、左遷の予言のように詩の一部を牡丹花の金字で韓愈に示していたエピソードがある。その間のいきさつが「太平記」の巻一「無礼講（ブレイコウノ）事付玄恵文談（ゲンエブンダンノ）事」に引かれていて、この詩句は人口に膾炙していた。詩句の大意は（雲が秦嶺山脈に横たわり、わが家がどのあたりになるのか見当も付かない。雪が藍関を深くうずめてわが馬は進まない。）左遷先へ赴く心細さを歌った詩句を若山が口ずさみ、お雪の歩が進まない様に重ねたもの。

（第二十五段）

屠所の羊の歩　屠殺所に引かれていく羊のように力ない歩み、また絶望的に死に近づくたとえ。

代脈　主治医に代わって診察する格下の医者。従って病の状況について確たる診断は下さない。

（第二十六段）

打着けに　突然、急に。

数でもなし　自然ななりゆき、情勢、状況ではない。

野面　いけしゃしゃあと遠慮のない、厚かましい顔。

北山　「北」と「来た」をかけて腹が減ること、空腹を表す。

月に村雲　「月に群（叢）雲、花に風」で、とかく事が都合よく運ばず支障が生じることをいう。

食傷　物事にあきることにも言うが、ここは食あたり。

（第二十七段）

殿　後駆（しりがり）から転じて、軍隊が退却するとき、敵の追撃を退ける役の部隊。転じて物事の最後尾。

いかに殿勤を通じようといって、貴公ではと思うで　殿

懇を通じるは、親しく交わる、男女が情交を通じる。対象が島野のことなので、人に知れてはまずい男女の交わりだからといって、すぐに白墨をつけずに保留しておいたのだ、の意。

美人（たぼ）　「たぼ」は日本髪の後方の膨らみを指す。ここから若い女性や酌婦などを「たぼ」と呼ぶ。

（第二十八段）

案を拍たないばかりで　考えに同調する風情で、の意か。

因果を含めた　（受け入れがたいことについて）理屈を分からせて、納得させた。

（第二十九段）

浅草俵町　東京都旧浅草区田原町。

番太　番太郎の略。江戸市中に設けられていた木戸の隣の小屋で木戸番をした者。駄菓子を売るなどの内職をしていた。

湯島　東京都文京区の地名。ちなみに湯島天神の境内には泉鏡花の筆塚がある。

雲井　刻みたばこの銘柄。

骨牌　花札。

爪弾　三味線を指で弾くこと、粋な遊び。

四人の口　祖父、母、滝太郎なら三人、父の存在を想定できるが、作中滝太郎の父への言及はない。

居食　働かず、手持ちの財産で暮らすこと。

佐竹ヶ原から御徒町　佐竹ヶ原は現在の東京都台東区台東あたりを指す。秋田佐竹氏の屋敷があったことからこう呼ばれる。御徒町は東京都台東区の地名。いずれも田原町に隣接し、明治には見世物小屋や商家が立ち並ぶ地域であった。

竹町　東京都台東区台東にかつて存在した町名。竹町もしくは下谷竹町。たけちょう。

しかりしがごとき母親が我慢の角も折れたかして　ここでの我慢は堪え忍ぶ意ではなく強情なさまをいう。そのように遊蕩に明け暮れた母親のうわべ突っ張った様子が柔らかくなって。

吾妻橋　浅草と対岸の向島を結ぶ隅田川にかかる橋。一八八五（明治一八）年に流失したが、一八八七（明治二十）年隅田川最初の鉄橋として架橋された。鋼製で、人道橋、鉄道（東京市電）橋、車道橋の３本が平行して架

けられていた。

（第三十段）

薪雑棒　薪を棒状に割ったもの。

言付け口　告げ口。

毫も　少しも、いささかも。

乳虎の威　本来は乳飲み子を抱えた雌虎は、気が立っていて危険なことをいうが、鏡花は滝太郎が虎の子のように手の付けられない乱暴者であることを形容するのに用いている。

猿屋の小楊枝　江戸時代猿を看板にして楊枝を売っていた店があった。猿は歯が白いから商標に用いたという説がある。

（第三十一段）

巣鴨　東京都豊島区の地名。西巣鴨（現在の東池袋）に巣鴨監獄があった。ちなみに第二次大戦後にはＧＨＱに接収されてスガモプリズンと呼ばれ、戦犯容疑者が収容され、極東国際軍事裁判で死刑判決を受けた東条英機らが処刑される舞台になった。

双葉にして芟らざれば　植物がはびこって手間がかからないうちに、双葉のうちに始末した方がよいの意。乱暴者を長屋内においておかず、追い出した方がよい。

差配　長屋の世話役。

涙金　手切れ金のように、関係を断つために与えるわずかな施し金。なみだきんとも、なみだがねとも。

金竜山　浅草浅草寺（せんそう）の山号。

無名指　「べにさし」とルビがあるように、紅を指すときに使う薬指。

御意は可しで　思い通りに。

ロハ台　只の字形から、無料のもの、無料にすることをロハという。無料で使える台、すなわちベンチ。

（第三十二段）

歩に取られて　夫に取られるに同じ。人足にかり出されて。

眉宇　宇は軒のことで、眉を目の軒とみたてて、眉のあたり、表情。

何条見免すべき　反語、どうして見逃すはずがあるか。

瞞めた　巧みに欺いてごまかした。

初更　一夜を五分した最初の時刻。暗がりになる時分で、午後七時頃から九時頃。

（第三十三段）

血道を上げて　本来は色恋に夢中になってのぼせることをいうが、ここでは夢中に探し求めての意。

（第三十四段）

世に有数の異相と称せらるる重瞳　「重瞳」は一眼に二つの瞳がある目。医学的には多瞳孔症といい、先天的な場合と、事故など物理的衝撃を受けてそうなる場合があるという。中国では貴人の相とされ、著名な人物が重瞳であったとされる伝承が多い。その影響からか、日本でも歴史上の人物を重瞳だったとする説がある。

家令　華族などの家の事務を取り扱う執事。

傅　貴人の子弟の守り役。

動殿のお湯殿子調姫という扱い　近松門左衛門作の浄瑠璃「丹波与作待夜の小室節」を引いた表現。東の入間家へ嫁入りする丹波の国由留木（ゆるぎ）家の息女調（しらべ）姫が江戸下りをいやがるのを、さまざまになだめ機嫌を取ることが描かれる。

親不知　越後国と越中国の間の断崖が続く北陸道の難所。現在の糸魚川市の西端。断崖と波が険しいため、親は子を子は親を省みることができない程に険しい道であることから親不知、子不知と呼ばれた。

（第三十六段）

贓品　盗みなど不正な手段で手に入れた品物。

阿魔　女性をいやしめて呼ぶ語。

清全寺　未詳。富山近傍で観音信仰に関わる大寺院としては、富山市婦中町の常楽寺には重要文化財に指定される観音仏像が安置されている例がある。

講中　寄進をする信者の団体。

肩衣　裃の上半身部分。

三方　神仏への供物などを乗せる白木の台。台の部分の前と左右に三ヶ所穴が空いているのでこの名がある。

（第三十七段）

支那　「ちゃん」とルビが振ってあるが、中国をいやしめて呼んだ語。

鳶口　棒の先端に鳶の嘴の形をした鉄製の鉤をつけた道具。木材などを引き寄せたり、火事の際建物を引き倒したりするのに用いた。

（第三十八段）

昂然　意気盛んなさま。

お茶坊主　江戸城中で、茶の湯や給仕をつとめた僧体の者だが、ここは華族に仕える家人を指している。宿直の武士も同様。

守山　第三十四段では「竜川守膳」が守り役として登場する。その人物を指すと思われるが、作者が名前を取り違えたものか。

（第三十九段）

お鳥目　穴あき銭、はした金。

灰吹　たばこ盆に付いている吸い殻を落とす筒。

苧環　糸に縒った麻を中を空洞にして丸く巻き付けたもの。

連判状の筆頭　連判状は秘密の約束などを守ることを誓って、署名捺印する書状。その筆頭につくということは、大きな計画の首謀者になることを意味する。

意気八荒を呑む　国の八方、隅々までその影響下におさめる。

（第四十段）

加州　加賀国（能登以外の石川県）のこと。

百金を得まく　百金を得るための手段として。「ま」は意思の助動詞の未然形、「く」は接続した語を名詞化する。

擬宝珠　橋や回廊の欄干の柱頭に付ける葱の花に似た飾り。

（第四十一段）

豊島莫蓙　てしまござ、摂津国豊島郡に産した藺（い）ござ。酒樽を包んだり、雨具に用いたりした。てしまむしろ。

兇状持　凶悪犯罪の前科のある者。

羽目　建物の壁面に打ちつけた羽目板。

榜示杭　境界を示す標柱。

随分　ずいぶんはせいぜいの意で、できるだけお達者で。

お兼は新庄の山を越えた…　新庄は富山市街の北東にある地名。富山の実際の地勢では、加賀を指して西に向か

うと呉羽山を越えることになる。またそこに神通川の支流が注ぐとすれば井田川になるが、岩滝に大岩や上滝を想定すると常願寺川が有力。また市中を北に向かうと飛騨に通じるというのも、実際の地勢からいうと正反対になる。鏡花がしつらえた文学的空間という他はない。

（第四十三段）

ほぼ一町もあるという、森の彼方にどうどうと響く滝の音　一町はおよそ一〇八メートル。この滝に擬せられる称名滝の落差は三五〇メートルあり、日本一の落差を誇る。上部から四十、五十八、九十二、百二十六メートルの四段から成り、一番下の段だけでほぼ一町となる。

夜眼一点の白　馬の顔にある白い模様のこと。通常星と呼ぶ。

（第四十四段）

庄司重忠　鎌倉時代の武将で鎌倉幕府の有力御家人。後に北条時政に謀反の罪を着せられて追討された。「源平盛衰記」に鵯（ひよどり）越の逆落としで重忠が馬を損ねまいと背負って坂を駆け下ったエピソードがある。

真桑　マクワウリという瓜の名。

有平　有平糖のことで、砂糖菓子の一種。

法印　「法印大和尚位」の略、僧位の最上位。

（第四十五段）

盲目滅法界　見当がつかずでたらめの事をすること。

一期でダーだと思ったね　一期は一生のこと、また死に際。これでしまいかと思ったの意。

空樽の腰掛け　一膳飯屋で椅子として置いてあったもの。華族が出入りするような所ではないところから滝太郎が出てきたことへの驚きが表現されている。

故障　差し障りがあるという意から転じて苦情のこと。

初音はこの時にこそ聞こえたれ　第四十一段の末尾に、茶店の娘たちの客引きの声が「鶯、時鳥」と表現してあり、それを踏まえてここでは鍵屋に初めて客入りがあって声が上がったことをこう表現している。

（第四十七段）

傍杖をくいません　傍杖はけんかのそばにいて、打ち合っている杖で打たれること。関係のない第三者が思わぬ

被害をこうむることを傍杖をくうという。

（第四十八段）

お褥が据わる　褥は座る時の敷物。勇美子が鍵屋に腰を落ち着けることになったということ。

癩・磔　癩はハンセン病患者を卑しんだ言葉。磔は罪を得て磔になるような奴めの意で、双方相手を口汚く罵っている。

角目立って　目つきをとがらせて。

冥利　神仏からの恩恵、幸運。

（第四十九段）

贅沢なんじゃあねえ　高級な（殊勝な）心がけではない。

めんないちどり　目隠しをした鬼が他の子どもを捕まえる遊び。ここは雀部が暗い中やみくもにお雪をとらえようとするさまをいう。

一張羅　持っているうちのとびきりの良い衣服。

（第五十段）

非職　現職でないこと。

兇星　災難によって不遇でいる大人物。

（第五十一段）

達引く　他人のために義理立てする。金を用立てる。

髢屋　髢は女房言葉で「か文字」から髪のこと。添え髪、入れ髪。

（第五十二段）

太平楽　もとは舞楽の曲。転じて好き勝手ででたらめな言い分。

小田原　小田原評定（結論の出ない相談）のこと。

郷屋敷田圃　富山市内を流れる神通川の岸辺にあった御用屋敷、現在の磯部堤周辺。前駆作と見られる「蛇喰ひ」の主要舞台として設定されている。

牛の淵　未詳。

篠を束ねて　篠は茎の細い笹、竹類。大雨が降るさまを形容する。

してこいな　身構える時にいう語。さあ来い。

（第五十三段）

乾坤別有天　乾坤は天地、別世界が広がっている、の意。

勁敵　強敵。

（第五十四段）

矢来　竹や丸太を組んだ仮の囲い。

（第五十五段）

ももんがあ　木から木へ滑空する動物。大鷲のことをさしているのだが、ここは単に獣・化け物めの意か。

（第五十六段）

斗大の肝　一斗もある大きな胆、大変な剛胆ぶり。

秋毫も　いささかも。

（第五十八段）

何らのものぞ　巌の裾をほる動物は「猿の年の…」と呟く。第三十二段に出る「天窓が石のような猿の神様」であろう。

（第六十段）

高張　高張り提灯。竿先に取り付けて高く掲げる。

滑川文学散歩　記録

金山　克哉

1、行田公園

「富山文学の会」は、令和元年十月五日に、富山県滑川市を中心とする文学散歩を行った。滑川市は富山県の中心部から見てやや東部に位置し、かつて大伴家持が歌に詠んだ早月川が流れ、立山山麓を間近に仰ぎ見る自然豊かな街である。また、海岸線からは、はるか富山湾の対岸に珠洲や輪島を持つ能登半島が眺望できる詩情あふれる場所でもある。

そんな滑川市にある自然豊かな行田公園は菖蒲で有名な名勝だ。自然と一体化したこの公園は、樹木が繁茂した野性味あふれる公園でもある。

その一角に、高島高の詩碑がある。高島高は滑川市に生まれ、東京遊学後、実家の医業を継ぐために帰郷し開業した。医師でありながら詩作にはげみ、みずから詩の雑誌なども編集した富山を代表する詩人のひとりである。高島高を中心に歩いてみるのが今回の文学散歩の目的である。

剱岳が見え
立山が見え
一つの思惟のように
風が光る

詩碑にはこのように刻まれている。昭和三十年六月十五日に刊行された『続北方の詩』の巻頭に置かれた詩「続北方の詩」の一節である。雄大な富山の立山の自然を描きつつ、そこから自らのいのちの在り方や生きる意志を確認する気概に満ちた詩である。筆は北川冬彦による。昭和四十年五月建立。

しかし、この詩碑を眺めているうちにひとつの疑問が生まれた。四行目の「風が光る」の部分はもとの詩「続北方の詩」の中では、「風が走る」となっている。この異同がなぜ発生したのかについては調査の必要がある。ただ、「光る」という明るさの中に結びがくるよりも、「走る」という鋭い身体感覚の中に結びがくるほうが、寒冷

の気流が直接皮膚に感じられて高島高らしい気がするのは私だけだろうか。

いずれにせよ、滑川の平野の中央に位置し、山と海がすぐ近くに感じられる行田公園は、滑川の風物を描いた高島高を尊ぶにふさわしい場所だと感じた。

2、高島高生家

滑川の海岸沿いに、加積雪嶋神社がある。すぐそこは海が広がっている。高島高の生家が近くにあることは知っていたが、正確な場所までは分からずにいたところ、地元の寺の住職から生家の場所を聞くことができた。住職は「詩人」という肩書きには反応せず、「医者」の高島高に反応した。地元滑川では、詩人としてよりも、医師として社会に貢献していた高島高の姿が想像される。徒歩わずか一分もかからないところに、生家がそのまま現存していた。寺院はその土地の歴史に密着しているため、地元の過去のことには詳しいのである。

二階建ての瀟洒な洋風建築。裏手には日本家屋が結合されており、大きな蔵もある。かなりの敷地面積だ。ここで高島高は生活し、患者たちを診察していたのだ。これだけの立派な家に住むとなると、当然地元では名士として名をはせていたことだろう。高島家の婚姻関係などを調べてみると、名家どうしのつながりが新たに見えてくるかも知れない。名家どうしのつながりの中に、文学者の存在も新たに確認できる可能性があるからだ。また、県内外の医師のネットワークを調査してみることも有意義であろう。様々な視点から関係図等を作ってみるといろいろなことが整理され、その中で人と人の新たなつながりが見えてくるかも知れない。

門柱に表札がある。そこには赤十字マークの下に「特別社員　高島高」とある。赤十字の特別社員とはいったいどのような立場の社員なのか、これも気になるところだ。家の玄関にも表札があり「高島学」とある。高の弟である。不在時の連絡先に「高嶋修太郎」の名が掲示されていた。高嶋修太郎氏は高の甥である。高嶋家の人たちが高の住んだこの家を大切に扱い、保存していることがよく伝わってきた。一度高嶋修太郎氏にお会いし、高についてうかがう機会を持ちたいものだ、と感じながら生家を後にした。

3、滑川市立図書館

一階の郷土資料の開架棚が充実している。資料請求しなくても、かなり詳しい資料をそのまま手にとって閲覧できるからだ。

また、二階の郷土資料室には驚いた。俳句と川柳の資料がかなりの量、そろっている。高の父である高嶋地作（号は半茶）も俳句をよくし、高もまた詩だけでなく俳句を詠んだ。川柳は社会情勢と切っても切り離せない要素を含み持つため、この川柳資料を踏査すれば、当時の社会を富山の人々がどのような目で眺め、それに風刺を加えながらいかに表現したかがわかるのではないか。坂田嘉英が寄贈した詩関係の書物も目白押しだ。

寄贈されたものがそのまま収蔵されているところがまた魅力だ。なぜなら、寄贈主の関心事によって、それらの資料はすでに分類済みということになるからだ。資料から聞き取れる声に耳を澄ませる時間は、すばらしい。

4、滑川市立博物館

平成十七年に高島高展を催しているのがこちらの博物館だ。

かなりくわしいパンフレットも作成しており、高島高研究の道標となる。二階の展示では、高島高と縁があった作家や詩人たちも一覧で観ることができる。

しかし、何よりも収穫だったのは、高島高の限定版である「久遠の自像」「人生記銘」のコピーを観ることができたことだ。

これらの書は活字化されていない。つまり、博物館に収蔵されているものが腐食したり散逸したりすれば、その資料は永遠に入手できなくなる、ということだ。

「久遠の自像」は貴重な資料だ。詩集『山脈地帯』（昭和十六年二月二十日）に納められている「山脈地帯　第1章」という詩がある。詩の最後に、「第1章」以外の続きは都合により破棄した、との旨が付記されている。この「第1章」は、北方の自然と民俗の厳しさと都会の生活を対比する形で描かれた長詩なのだが、男女の恋模様や死生観なども折り交えて書かれており、陰影の濃い作

品となっている。私もかねてから続き（第2章以降）が読みたいと思っていた。それが「久遠の自像」に収録されているから驚きではないか。もしこれを翻刻し、「山脈地帯　第1章～10章」までを通読することができたならば、文学研究としても得られる成果は大きいだろうし、ひとりの読者としても大変喜ばしい。また、「麺麭」と「昆侖」のコピーを観ることができたこともありがたかった。特に「麺麭」には、高島高が直接書き込んだと思われる「自筆訂正」が残されていたからだ。高島高が文章に対して考えていた訂正の理由や判断基準などが透けて見えて、実に興味深い。

5、まとめ

わずか半日の小旅行であったが、内容的にはかなり充実したものになったのではないか。

フィールドワークによって現地の風物に直接触れてイマジネーションをふくらませたことに加えて、文学研究に欠かせない「資料」、つまり原典の存在が明らかになったことは大きな収穫だった。「ここに行けばこの資料と出会える」ということのリマインドになったことで、また次回、資料と再会しじっくりと対話する機会を待つ喜びを得ることができたからだ。

文学散歩報告　いたち川沿いを歩く

高熊　哲也

今年度（二〇二〇）は新型コロナウィルスの感染拡大で、大会が中止され、総会も紙面実施となり、なかなか例会が開けない状況が続きましたが、感染状況が小康を保ち、屋外の文学散歩なら可能かということで、以下の形で企画・実施いたしました。実施報告を記します。

【日時】九月一二日（土）一〇：〇〇～一二：〇〇

【主題】いたち川の地蔵群を巡り、あわせて宮本輝の「蛍川」の舞台を歩く

＊石倉町延命地蔵尊周辺

まずは、石倉町延命地蔵尊前に集合。参加者は、黒崎さん、近藤さん、高熊の三名だけでしたが、状況に鑑みやむをえません。ささやかながら本会の活動再開を喜ぶと同時に、一刻も早い感染収束を地蔵尊に祈りつつ、散策を開始しました。

宮本輝の「蛍川」の末尾では主人公水島竜夫、竜夫が密かに思いを寄せる英子、夫重竜を亡くしてこの蛍狩りにこの後の身の振り方を占おうとする竜夫の母千代、案内役の銀蔵が、いたち川を遡る道行きが描かれます。地蔵尊の西側富岩街道を渡ったあたりが豊川町で、作品の中では竜夫の住まいがあったと設定されています。宮本輝自身が富山にいたときに住んでいたところもこの豊川町です。

地蔵尊の東側、いたち川に架かる泉橋を渡ったところに、源氏鶏太の生家があったことについては、今回も参加された近藤さんがご紹介なさったことがあります。橋のたもとには源氏鶏太の文学碑が建っています。地蔵尊前の石倉町には飲食店などが軒を連ねる商店街がありますところとして栄えていたようです。店名は伏せますが、おそば屋さんや焼き肉店など、多くの御常連さんをお持ちの名店が、ここ数年相次いでお店を閉められたのは寂しい限りです。

お地蔵さんへの信仰は篤く、町々で今でも夏には地蔵祭りが行われています。一つには安政五（一八五八）年

の飛越地震によるトンビ崩れが引き金となって、神通川を流れ下った土石流がいたち川にも流入して甚大な被害を出したこと、もう一つには、太平洋戦争時富山市街を灰燼に帰せしめた大空襲の記憶、失われた命への鎮魂の祈りが引き継がれての信仰だと思いをいたしました。（地蔵群の発祥は大地震を遡る）

＊どんどことかっちゃ

まだ残暑の日差しを桜並木でよけながら、東橋、久右衛門橋、このて橋…といくつもの小橋を横目に見ながら上流へ向かうと水神社橋のたもと水神社にいたります。このあたりから川の流れにさざ波が立つようになります。奥田用水の取水堰堤としてどんどこ公園が整備されたのは二〇〇三年だそうです。そもそも「どんどこ」という呼称は、急な川の流れをコントロールするために設けられた堰を流れる水音によるもの。同名の公園が砺波市にもあります。水辺に涼を求めるスポットとして近隣の人々に昔から親しまれてきました。

どんどこから上流にむけてかつて「かっちゃ」と呼ばれる水車群がありました。こちらも水車の力を利して米や麦、さらには薬の原料を搗く音（擬音語で言えばがちゃん、ぐらいでしょうか）からの呼称かも知れません。伏木で曳山をぶつけることを「かっちゃ」と呼ぶ例が思い出されます。また富山では米や餅を搗くことを「かつ」と言います。特に薬かっちゃは匂いがきつく、当時の思い出話が後掲の参考図書「鼬側の記憶」に膏薬工場の存在などとともに語られています。

「かっちゃ」は「蛍川」が舞台とする一九六〇年代にはほぼ姿を消していたと思われますが、「どんどこ」からだんだん町の灯を離れ、蛍を目指して次第に暗くなっていく道を竜夫たちがたどったのでしょう。

＊立山道道標と馬頭観音

通称有沢線を渡ってさらに上流に向かうと、左前方に立山連峰が姿をはっきりさせてきます。富山地方鉄道不二越線の踏切を越す手前に、上野（うわの）の酒屋がありました。筆者が大泉中学出身の知人（六十五才）が、かつては賑やかだったことを懐かしそうに語ってくれま

した。大泉駅の西側で、いたち川と広田用水、鉄路と道路が入り組み、道路の拡幅整備の計画がなかなか進まず、上野の酒屋の跡地は今も空き地のままです。その空き地の角に、立山道への道標が残っていて、天保十一年の年号が刻まれています。酒屋跡の空き地を左に踏切を越えて行くと、筆者の勤務校富山高等専門学校（本郷キャンパス）に至ります。その先北陸自動車道を越えて直進すると上滝にいたり、常願寺川を渡ると雄山神社前立社壇です。今回は訪れませんでしたが、本郷の地には立山信仰と縁の深い刀尾（たちお）神社があり、かつてこの立山道を通って登山を志すものは必ず拝礼してから向かったということです。

なおもいたち川にそって歩みを進めていくと、まもなく大きなケヤキの木陰に馬頭観音があります。慶応元年建立と裏に刻まれています。このあたりまで来ると、ほぼ川沿いは田んぼになります。大きな車道からは外れ、現在は大泉あたりからだと巨木と馬頭観音の存在には気づけませんが、かつては大泉よりかなり北からでも望めたランドマークだったはずです。富山の町を離れ神聖な立山の世界へ向かうスタートラインにあたることが実感されました。

＊蛍の舞う地

最後に、「蛍川」のラストシーンで蛍が群れ舞ったのはどのあたりか？という疑問にいきつきます。広瀬誠が「鼬川の記憶」で「戦災と蛍の大群」と題して、角川源義が富山大空襲の折に、いたち川沿いで蛍の大群に出会った思い出を辺見じゅんに話したエピソードを紹介し、広瀬自身が蛍を見た経験も語っています。しかし作品の中の蛍の舞う地は大泉からかなり遡っており、角川や広瀬の見た位置ともずれそうです。また、管見に入った限りでは、作品に描かれたような蛍の群れの直接のモデルにあたるようなエピソードや言い伝えに接したことはありません。

本郷地区出身の筆者の叔母（宮本輝と同年代）にも尋ねて見ましたが、本郷あたりでそういう話は聞かないということでした。かつてはどこの農村でも蛍は舞っていましたから、意外と記憶には鮮明には残らないのかも知れません。今回も蛍の舞う地は謎のまま残されてしまっ

たなと、散歩の帰途に訪れた蛍川の文学碑の傍で、モデルと「虚構」の狭間を行きつ戻りつ。

☆参考文献　島原義三郎・中川達編「鼬川の記憶」桂書房（二〇〇四年）

富山文学の会　2019・2020年度　活動報告

第70回	6/22（土）	**研究会**	地域×文学×アニメ ―「ロケ地探訪」は「文学散歩」と同義か？	（富山高専本郷） 近藤周吾	8名
第71回	9/1（日）	**公開読書会**	高島高と富山	（富商会館） 金山克哉	5名
第72回	10/5（土）	**文学散歩**	滑川文学散歩	金山克哉	5名
第73回	12/6（金）	**忘年会・打ち合わせ**		（ウィットモア）	6名
第74回	2020/2/12（土）	**研究会・打ち合わせ**	柏原兵三「長い道」をめぐって	（富山高専本郷） 高熊哲也	5名
第75回	9/12（土）	**文学散歩**	いたち川の地蔵群を巡り、 あわせて宮本輝の「螢川」の舞台を歩く	高熊哲也	3名
第76回	12/12（土）	**研究会**	高山羽根子「首里の馬」論 ――牧野信一「夜見の巻」との比較	（富山高専射水） 近藤周吾	5名
第77回	2021/2/10（水）	**研究会**	「「宮崎健三」という富山出身の詩人について」	（富山高専本郷・リモート） 金山克哉	5名
第78回	3/28（日）	**総会**		（富山高専本郷・リモート）	

群峰　第5号　富山文学の会10周年記念号

発行日：２０１９年４月20日

◇特集　富山文学の会10周年
高志の国文学館
　お祝いのことば
富山高等専門学校
　祝辞
金子　幸代
　「群峰」記念号に寄せて
富山文学の会
　富山文学の会　十年の軌跡
　――二〇〇九年から二〇一八年まで――
黒﨑　真美
　富山文学の会発足あれこれ
高熊　哲也
　富山文学の会との出会い
今村　郁夫
　金子幸代氏の講義と富山関係の業績
綿引　香織
　高志の国文学館と富山の文学
近藤　周吾
　富山高専と富山文学の会
西田谷　洋
　尾島菊子『教育勅語御伽噺　少女の一念』のこと
金山　克哉
　さまざまな〈富山〉
◇研究論文
水野　真理子
　小寺菊子の死生観
　―「逝く者」より
金山　克哉
　高島高詩集『山脈地帯』における「戦争の詩」
丸山　珪一
　堀田善衛の天皇小説「曇り日」をめぐって
中山　悦子
　佐多稲子「水」における敗北と春の陽
　―感情表現をふまえて―
高熊　哲也
　黒部ダムをめぐる作品群
　―吉村昭「水の葬列」と「高熱隧道」、そして木本正次「黒部の太陽」
谷川　拓矢
　断絶と和解の円環
　―山川健一『人生の約束』論
関戸　菜々子、姫野　諒太郎、早瀬　裕也、小谷　瑛輔
　ナツヅタの樹液による芋粥再現実験
◇２０１８年度　活動報告

編集後記

▼昨年（二〇二〇年）は新型コロナウイルス感染症の拡大により、日常生活などにさまざまな影響が生じ、大変な一年だったことと思います。富山文学の会も研究大会の中止（延期）、例会の中止など、活動の機会を持つことがなかなかできませんでした。感染対策を行いながら研究を進めることは難しいにもかかわらず、今号には計８編の研究論文などが集まりました。執筆者の研究意欲の強さを感じました。

▼今号では、郷土誌『高志人』を創刊した翁久允を特集しました。翁久允のご息女の逸見久美先生、ご令孫で逸見先生の甥御さんの須田満先生のお二方からもご寄稿いただき、大変充実した特集になったと思っています。翁久允に光を当てることは、富山の文学研究を深めることにもつながるのではないかと考えています。

▼新型コロナに関連して「ウィズコロナ」、「新しい生活様式」などの言葉が生まれたように、今後もこの感染症とうまく付き合っていく必要があるのかもしれません。富山文学の会では、このような状況に対応すべく、今年からは例会のリモート開催も試みています。議論し、研究を深めていくためにも、発表の場を確保することは重要だと考えています。今後も、世の中の変化に対応しながら活動を続けていきたいと思います。

今村記

群峰　第６号
二〇二一年四月一日　発行
編集・発行　富山文学の会
連絡先　富山市本郷町13
富山高等専門学校（本郷キャンパス）
高熊教員室